

Antenna House PDF Server V3.5 スタートアップガイド

著作権について

本書とソフトウェア、及びそれらに記載されている内容は、著作権法によって保護されています。本書の内容の一部、または全部をアンテナハウス株式会社の書面による許可なく、複製、送信、情報検索のために保存すること、日本語以外の言語に翻訳することを禁じます。

Adobe、Acrobat、および Distillerは、Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社)の米国ならびに他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Excel、PowerPoint、Word、および Visioは米国 Microsoft Corporationの米国およびその他に国における登録商標または商標です。

その他の会社名、製品名は、一般に各社の商標または登録商標です。

製品の保証について

ユーザーが、本ソフトウェア、及びマニュアルを使用することによって生じた、または使用できないことによって生じたすべての損害について、アンテナハウス株式会社、またはその代理人が有形または無形の責任を負うことは一切ありません。

一般的な注意事項

本書で使用している図版は、それぞれ典型的な例であり、実際にソフトウェアを利用している最中の画面、または実物と必ずしも一致しない場合があります。

あらかじめご了承ください。

本書、及びソフトウェアに記載されている事項は、将来改良の為、予告なく変更される事があります。

目次

1. はじめに.....	5
2. 準備とインストール.....	6
2.1. PDF Server を利用するために必要なシステム.....	6
2.2. インストール.....	7
2.2.1 バージョンアップについて.....	8
Ver.2.x 以前からのバージョンアップ.....	8
Ver.3.0/3.1 からのバージョンアップ.....	9
2.2.2. PDF Server のインストール.....	10
2.2.3. PDF Server 評価版から正規版への変更.....	16
2.2.4. PDF コンバーターについて.....	17
2.2.4.1. オフィス / アプリケーション変換を行わない場合.....	17
2.2.4.2. クライアント OS などでユーザーアカウント制御が有効な場合..	17
2.2.4.3. リモートデスクトップをご利用になる場合.....	18
2.3. アンインストール.....	23
2.3.1. PDF Server のアンインストール.....	23
2.3.2. PDF Driver のアンインストール.....	24
3. PDF Server について.....	25
3.1 PDF Server とは.....	25
3.2. PDF Server のシステム構成.....	27
PDF Server サービス (AH PDF Server V3 Service).....	28
PDF コンバーター.....	28
PDF Server V3.5 コントロールセンター.....	29
PDF スプリッター.....	29
ログビューア.....	29
設定編集ツール.....	29
PDF Driver.....	29
PDF Server コマンド.....	30
3.3. ソフトウェア間の連携について.....	31
3.4. エディションと評価版.....	32
3.4.1. エディションの種類.....	32
3.4.2. 評価版と正式版.....	33
4. PDF Server の運用について.....	34
4.1. PDF Server を動作させるコンピュータのハードウェアとその環境について....	34
4.2. 運用規模の推定.....	35
4.3. メンテナンスについて.....	36

5. PDF Server の基礎知識.....	37
5.1. タスクについて.....	37
5.2. 基本的なファイル変換の流れ.....	39
5.2.1. テキストファイル変換.....	39
5.2.2. イメージファイル変換.....	40
5.2.3. オフィスファイル変換.....	41
5.2.4. アプリケーション変換.....	42
5.2.5. PDF 変換.....	43
5.3. 自動ログオンと再起動.....	44
5.3.1. 自動ログオンと PDF Server の自動起動.....	44
5.3.2. 再起動.....	46
6. タスク設定のテクニック.....	51
6.1. IN/OUT モード.....	51
6.2. PDF 編集の簡略化.....	54
6.3. PDF/A、PDF/X 変換.....	55
6.4. Web 表示に最適化.....	57
6.5. OCR.....	58
6.6. QR コード.....	60
6.6.1. QR コードの貼り付け.....	60
6.6.2. QR コード読取.....	61
6.7. 閲覧制限期限.....	63
6.8. 結合.....	65
6.9. トリガーファイル.....	66
6.10. タスクの連動.....	67
7. PDF Server の制限事項.....	68
7.1. PDF Server 全般の制限事項.....	69
PDF Server が取り扱うことができるファイルのフルパスについての制限事項... 70	
フルパスに影響を与える設定.....	70
7.2. Microsoft Office ファイル変換時の制限事項.....	72
7.3. アプリケーション変換時の制限事項.....	74
7.4. PDF Driver 設定の制限事項.....	75
7.5. OCR の制限事項.....	76
7.6. TIFF の制限事項.....	77
7.7. ログの制限事項.....	78
7.8. PDF Server コマンドの制限事項.....	79
7.9. その他の制限事項.....	80

8. PDF Server コマンド [プロフェッショナル版 / コマンド版] ...	81
8.1 PDF Server コマンドの注意事項	81
8.2. PDF Server コマンドで行うことができる事	82
8.2.1. 入力ファイルのみを指定する	82
8.2.2. OCR を実行してから PDF に変換する (マルチプロセス非対応)	82
8.2.3. PDF ドライバの設定を指定して PDF に変換する	82
8.2.4. アプリケーション変換を行って PDF に変換する (マルチプロセス非対応) ...	83
8.2.5. 変換設定を利用して変換を行う (マルチプロセス非対応)	83
8.2.6. 出力ファイルを任意のフォルダに出力する	83
8.2.7. PDF ファイルを結合する	84
8.2.8. その他のオプションや注意事項	84
8.2.9. 他のアプリケーションから呼び出して利用する場合の注意事項	84
8.2.10. マルチプロセスで利用する場合の注意事項	84
9. QR コード作成ツール	85
9.1. ラベル印刷用データについて	86
10. PDF スプリッタ	92
10.1 ターゲットとなる PDF ファイルについて	92
10.2. PDF スプリッタの設定について	93

1. はじめに

「Antenna House PDF Server V3.5」（以降、「PDF Server」と略す）は、指定したフォルダ内のドキュメントをあらかじめ設定した内容で自動的に PDF などに変換する事が出来る監視型のサーバーサイドソフトウェアです。このスタートアップガイドでは、導入から設定方法、制限事項など運用されるお客様に知って頂きたい重要な情報が記載されております。ご利用になる前に是非ご一読頂き、正しく運用を行うための知識としてご活用下さい。

PDF Serverは、以下のマニュアルが付属します。

それぞれのマニュアルを参考にしながら PDF Serverを運用して下さい。また、不明な点があれば、技術サポート窓口にお問い合わせください。

▼スタートアップガイド(本書)

PDF Server をインストールし、運用するための基礎的な事項が記述してあります。

▼ユーザーズマニュアル

PDF Server の機能毎に詳細な解説を行っています。それぞれの項目で操作等が不明な場合、参照して下さい。

▼Antenna House PDF Driver 利用ガイド

PDF Server に付属している PDF 生成仮想プリンタドライバ「Antenna House PDF Driver 7.5」のマニュアルです。PDF Driver の詳細な設定については、これを参照して下さい。なお、これに記載されているアドインボタンは、PDF Server では利用出来ません。

▼QR コード作成ツール ユーザーズマニュアル

PDF に QR コードを貼り付けたり、QR コードのみを出力したりできるクライアントツールのマニュアルです。

▼PDF Server V3.5 製品情報 Web サイト

<https://www.antenna.co.jp/psv/>

2. 準備とインストール

2.1. PDF Serverを利用するために必要なシステム

PDF Server を利用するためには、以下に示すコンピュータシステムが必要です。ソフトウェアをインストールする前にお使いのコンピュータシステムが以下に示す条件を満たしていることを確認してください。

オペレーティングシステム(OS)

Microsoft Windows Server 2016
Microsoft Windows Server 2019 (すべて日本語版)

Microsoft Office (Microsoft Excel/PowerPoint/Word)

Microsoft Office 2013
Microsoft Office 2016
Microsoft Office 2019 (すべて日本語版)

注意: PDF Serverを用いてMicrosoft Office文書をPDFファイルに変換する場合には、上記のMicrosoft Office製品のいずれかを一つだけインストールする必要があります。

CPU

Intel Pentium4/1.2GHz以上、または、これと100%の互換性を持つプロセッサ
(Intel Core i7 など 2GHz以上のマルチコアプロセッサを推奨)

メモリ

上記OSが必要とする最低メモリに加えて「PDF Server」用に512MB以上のメモリ
(2GB以上を推奨)

ハードディスク

システムドライブに500MB以上の空き容量が必要(2GB以上の空き容量を推奨)

注意: 上記ディスク容量には、PDF Serverが作成するPDFファイルなどの容量は含みません。

CD-ROMドライブ/アダプタ

上記コンピュータでの完全に動作が保証されているCD-ROMドライブ

重要・ここで示すハードウェアの要件は「最低限」のものであり、ご利用になる OS によっては条件を満たさないケースもあり得ます。そのため、OS の動作環境についても留意する必要があります。

- ・PDF Server を Windows 10/11 などのクライアント OS にインストールすることは可能ですが、その動作については一切保証しておりません。
- ・PDF Server は変換効率を上げるため、利用できるリソースを最大限使用して動作します。Web サーバやデータベースサーバなど他のシステムと同一マシンで併用する事は、速度低下や異常停止などの動作につながり、安定して動作させることが困難になります。出来るだけ、専用マシンをご用意下さい。
- ・アプリケーション変換を利用する場合には、PDF Server を動作させるコンピュータに変換したいドキュメントを作成したアプリケーションソフトをインストールする必要があります。
- ・プラットフォーム動作保証に関する仕様変更により、PDF Serverが対応するOS は、マイクロソフト社のメインストリームサポート期間内のものに限り、(メインストリームサポートが終了したOSはサポート対象外となります。)
https://www.antenna.co.jp/news/2021/platform_20210426.html

2.2. インストール

注意：PDFServerをインストールする前にインストール先のコンピュータが、ソフトウェアが動作するために必要な条件を満たしていることを確認して下さい。
(詳細については、付属の製品マニュアルを参照して下さい。)

2.2.1 バージョンアップについて

Ver.2.x以前からのバージョンアップ

PDF Serverは、以前のバージョン(クセロ PDF Server Ver.1.xや PDF Server Ver.2.x)とは完全に独立しており、その設定等を利用することはできません。(ライセンスファイルについても、以前のバージョンのライセンスファイルは利用できません。)

また、Ver.2.x以前のバージョンと同時にインストールされている状態でも問題なく動作するように設計されておりますので、PDF Serverをインストールする前に以前のバージョンをアンインストールする必要はありません。

※ PDF Serverが動作するには、大量のシステムリソースを消費します。無用なトラブルを避けるためにも PDF Serverをインストールする前に以前のバージョンをアンインストールされることをお勧めしております。

Ver.3.0/3.1からのバージョンアップ

PDF Server V3.5では、Antenna House PDF Driverが、更新されています。

V3.0/3.1から V3.5にバージョンアップする場合には、一旦 Ver.3.0/3.1と Antenna House PDF Driver(5.0、または 6.0) をアンインストールした後、PDF Serverと製品に同梱されている Antenna House PDF Driver V7.5をインストールして下さい。PDFServer V3.0/3.1をアンインストールしても、タスク/変換設定は保持されたまま残りますが、PDFServer共通設定は削除されてしまいます。PDFServer共通設定を継続して利用する場合には、以下の方法に従って作業します。

1. PDF Server V3.0/3.1のインストールフォルダ内に保存されている設定ファイル「pdfserver_v3.ini」を適当なフォルダにコピーします。
2. PDFServer V3.0/3.1をアンインストールした後、本製品をインストールします。
3. 【コマンドライン版のバージョンアップ時を除く】
手順 1でコピーした設定ファイル「pdfserver_v3.ini」をPDFServerのインストールフォルダに上書きコピーします。

注意: 64-bit OSをご利用の場合、PDFServerのインストールフォルダが

「C:\Program Files\Antenna House\PDF Server V3」
に変わっているため、タスク/変換設定ファイルのコピーまたは移動していただく必要があります。

また、OCRエンジンなどの更新により変換設定が変化しております。

V3.1/V3.0で使用していた変換設定は、変換設定ツールを用いて更新(変換設定を開いて表示するだけで結構です)していただくことを推奨致します。

重要: PDFServer V3.0コマンドライン版からのバージョンアップを行う際に旧バージョンで使用した設定ファイル「pdfserver_v3.ini」を上記手順3の説明に従ってPDFServerのインストールフォルダに上書きコピーするとオフィス/アプリケーション変換が正常に動作しなくなる恐れがあります。

オフィス/アプリケーション変換が正常に動作しなくなった場合には、デスクトップ上のショートカット「PDFServer V3.5 コマンド」を起動し、設定エリアのチェックボックス「Office/アプリケーション変換にPDFコンバータを使用する」からチェックマークを外した後、「登録」ボタンをクリックして下さい。これで以前と同じ動作となります。



PDF Server V3.5 コマンドの
ショートカットアイコン

また、PDFServer V3.0/V3.1でカスタマイズした PDF ドライバの印刷設定を継続して利用する場合には、PDF ドライバ Ver.5.0/6.0の印刷設定ファイルを Ver.7.5の印刷設定保存フォルダにコピーします。

Ver.5.0/Ver.6.0/Ver.7.5のPDFドライバの印刷設定保存フォルダは、それぞれ以下の通り:

Ver.5.0

%USERPROFILE%\AppData\Roaming\AntennaHouse\PDF_Driver\5.0\CustomSettings

Ver.6.0

%USERPROFILE%\AppData\Roaming\AntennaHouse\PDF_Driver\6.0\CustomSettings

Ver.7.5

%USERPROFILE%\AppData\Roaming\AntennaHouse\PDF_Driver\7.5\CustomSettings

2.2.2. PDF Serverのインストール

次に示す手順に従って PDFServerをインストールします。

※ Excel/PowerPoint/Wordなど、Office文書をPDFファイルに変換するには、Microsoft Office 2013/2016/2019(64-bit版の利用を推奨)をインストールする必要があります。Officeのインストール方法については、Office付属のマニュアルなどを参照して下さい。

PDF Serverをインストールするには、PDF Server本体をインストールする前にPDF Driver Ver.7.5を先にインストールする必要があります。

1. 一旦コンピュータを再起動し、管理者権限を持つアカウントでログオンします。
2. ウィルス感染防止用などの常駐型を含む全てのアプリケーションを終了します。
3. まず、OfficeファイルをPDFファイルに変換するためのプリンタドライバ「Antenna House PDF Driver 7.5」をインストールします。インストーラを実行する前に他のアプリケーションがすべて終了していることを確認して下さい。(動作しているものがあればすべて終了します。)

※ コンピュータにVisual C++ 2015 Redistributable (x86/x64) がインストールされていない場合には、PDF Driver のインストール中にこのインストーラが起動します。その場合には、表示されるメッセージにしたがってインストールしてください。

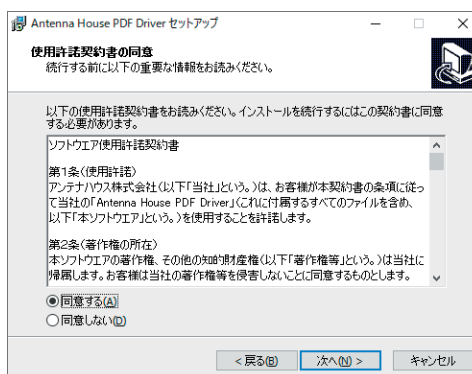
ドライバのセットアッププログラムアイコン「PDF Driver_setup.exe」をダブルクリックして起動します。

Antenna House PDF Driverセットアップウィザードの画面が表示されます。



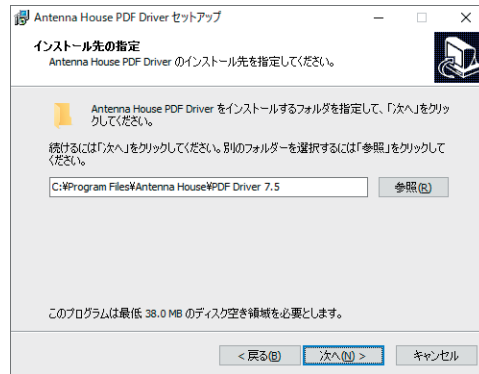
【次へ】ボタンをクリックして作業を進めます。

4. 「使用許諾契約書の同意」画面が表示されます。



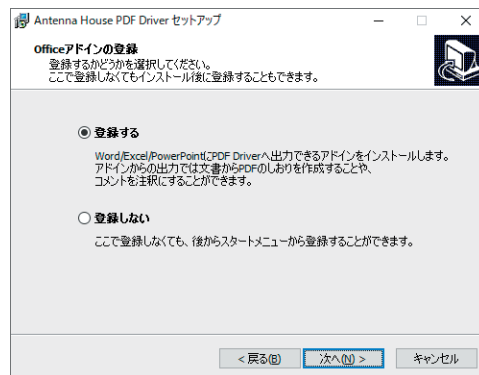
ソフトウェア使用許諾系尺書の内容を確認した後、ラジオボタン「同意する」を選択した後、【次へ】ボタンをクリックして作業を進めます。

5. インストール先の選択画面が表示されます



設定を変更せず、そのまま【次へ】ボタンをクリックして作業を進めます。

6. 「Officeアドインの登録」画面が表示されます。



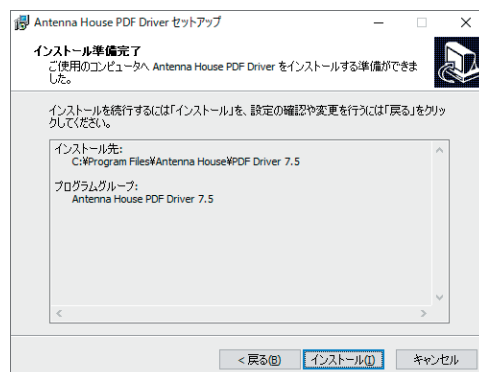
設定を変更せず、そのまま「登録する」を選択したまま、【次へ】ボタンをクリックして作業を進めます。

7. 「プログラムグループの指定」画面が表示されます。



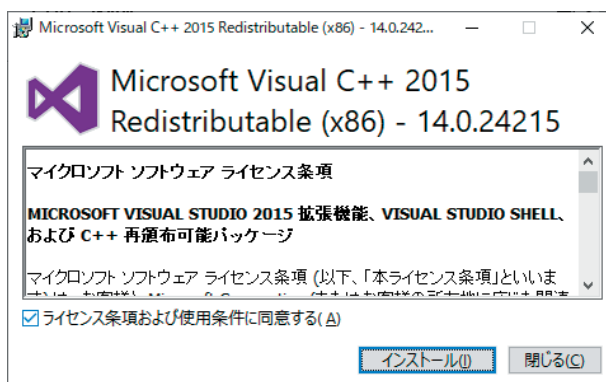
設定を変更せず、そのまま【次へ】ボタンをクリックして作業を進めます。

8. 「インストール準備完了」画面が表示されます。



【インストール】ボタンをクリックして作業を進めます。

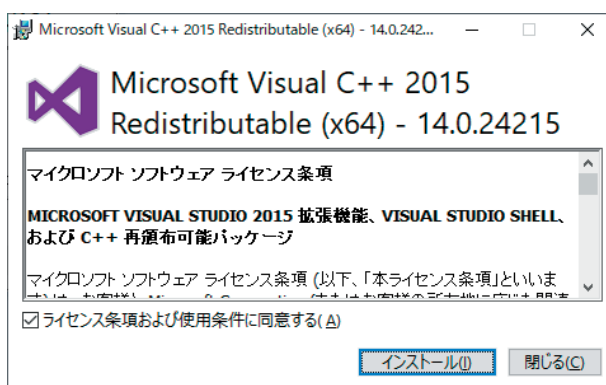
9. コンピュータにMicrosoft Visual C++ 2015 Redistributable (x86)がインストールされていない場合には、これのセットアッププログラムが起動します。



「Microsoft Visual C++ 2015 x86 Redistributable セットアップ」画面

画面中にあるチェックボックス【ライセンス条項および使用条件に同意する】にチェックマークを付けた後、【インストール】ボタンをクリックしてこれをインストールします。

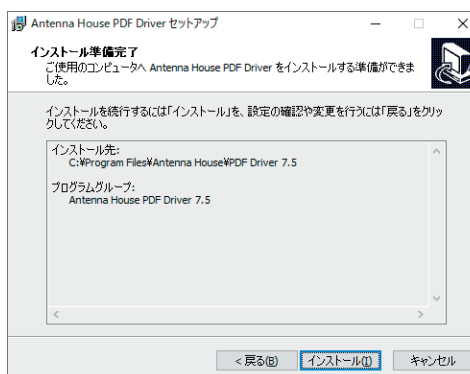
10. 同様にコンピュータにMicrosoft Visual C++ 2015 Redistributable (x64)がインストールされていない場合には、このセットアッププログラムが起動します。



「Microsoft Visual C++ 2015 x64 Redistributable セットアップ」画面

画面中にあるチェックボックス【ライセンス条項および使用条件に同意する】にチェックマークを付けた後、【インストール】ボタンをクリックしてこれをインストールします。

11. 「インストール準備完了」画面が表示されます。

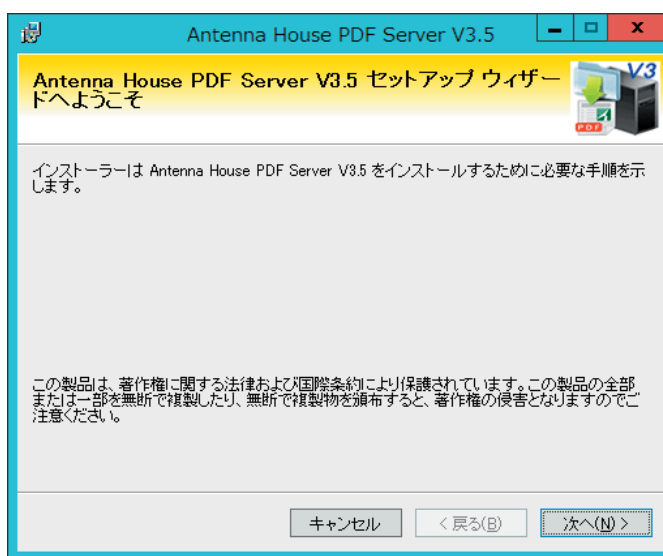


【インストール】ボタンをクリックしてPDFドライバのインストールを開始します。

12. インストール作業が行われた後、Antenna House PDF Driver のインストール完了を示す画面が表示されます。

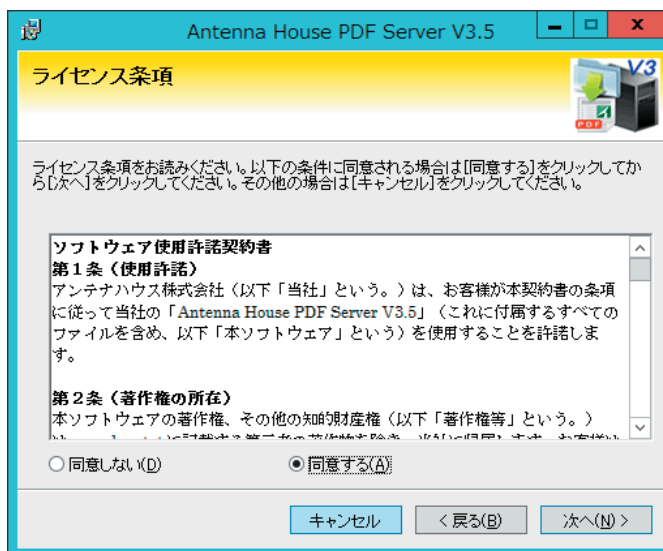


13. 続いて「PSV35_Setup.exe」アイコンをダブルクリックしてPDF Serverのセットアッププログラムを起動します。



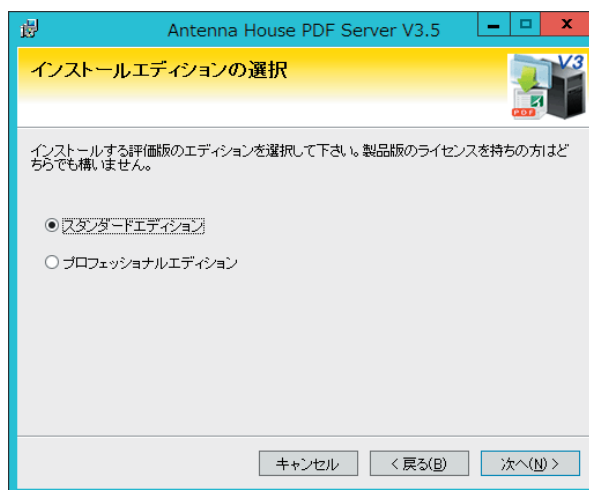
PDFServer V3.5のセットアップウィザード画面が表示されますので、【次へ】ボタンをクリックし、作業を進めます。

14. ライセンス条項画面が表示されます。

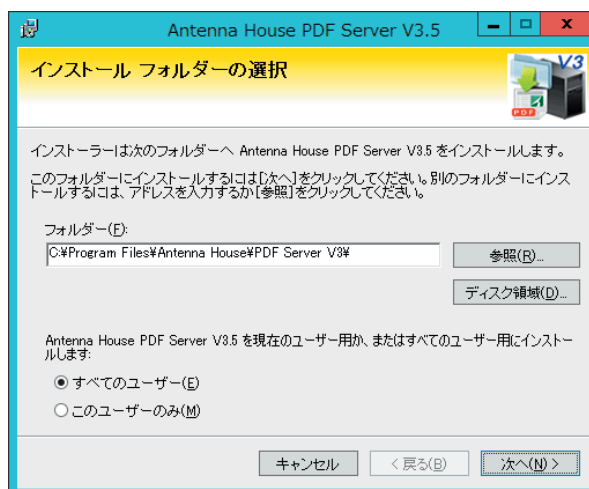


ラジオボタン【同意する】をクリックして選択した後、【次へ】ボタンをクリックして作業を進めます。

15. インストールするエディションのラジオボタンをクリックして選択した後、【次へ】ボタンをクリックして作業を進めます。



16. 製品のインストール先フォルダを指定します。

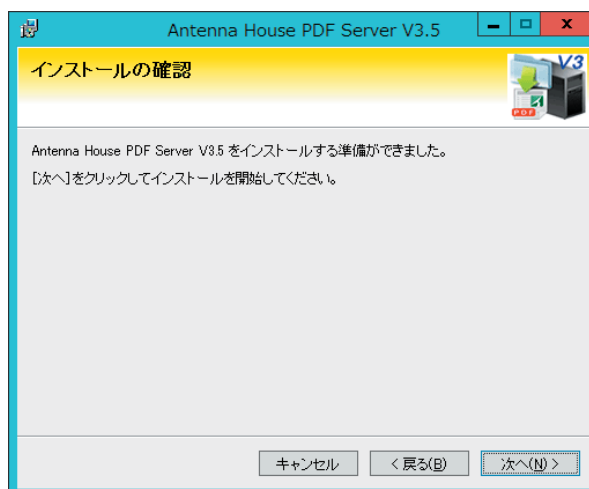


初期状態には、フォルダ

C:\Program Files\Antenna House\PDF Server V3

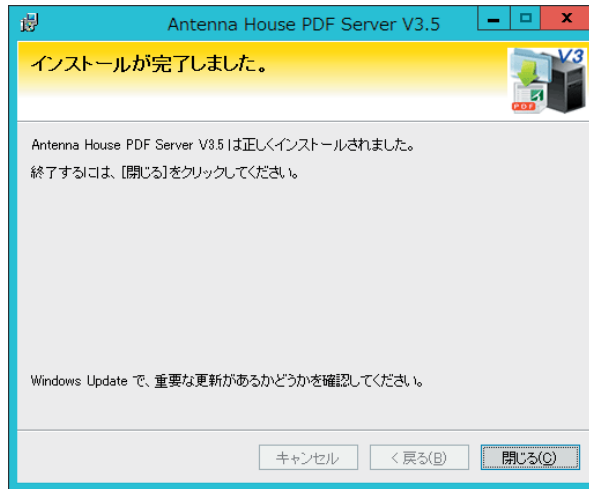
が選択されています。

17. インストールの確認画面が表示されます。



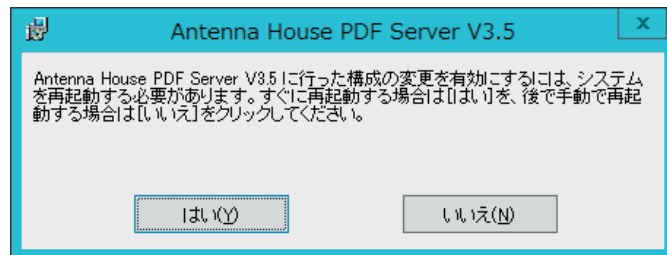
今までの設定に誤りがなければ、【次へ】ボタンをクリックしてインストール作業を実行します。設定を修正したい場合には、【戻る】ボタンをクリックして必要な修正をします。

18. PDFServerのインストールが完了したことを示す画面が表示されます。



【閉じる】ボタンをクリックしてこの画面を閉じます。

19. コンピュータの再起動を行うか否かをたずねるダイアログが表示されます。



「はい」を選択して、コンピュータを再起動してください。

2.2.3. PDF Server評価版から正規版への変更

PDF Server をはじめてインストールした直後は、評価版として動作します。インストールしたPDF Server を正式版として動作させるためには、正規版のライセンスファイルをシステムの所定の場所にコピーする必要があります。

ここでは、ライセンスファイルのインストール手順を説明します。

※ コマンドライン版をご購入になられたお客様で、事前に製品をプロフェッショナル版にて評価いただいている場合、インストールされているプロフェッショナル版をアンインストールした後、改めてコマンドライン版をインストールして頂く必要があります。製品のアンインストールについては、「[2.3. アンインストール](#)」の項をご覧ください。

※ PDF Server V3.5 は、これより古い製品のライセンスファイルでは動作しません。PDF Server V3.5 へのアップグレードについては、弊社営業、または保守窓口までお問い合わせください。

1. PDF Server のインストール CD-ROM 内の「License」フォルダにあるライセンスファイルを用意します。(ライセンスファイル名は「**svplic.dat**」です。) 保守期間などの更新時の場合には、お手元に届いた更新版を納めたメディア内の「License」フォルダ内にあります。

2. PDF Serverの本体を停止してコントロールセンターを閉じます。

PDFコンバーター/PDFスプリッタは、停止しなくても構いません。その後、ライセンスファイルをエクスプローラ等でインストールフォルダにコピーします。インストールフォルダは製品インストール時に変更していなければ以下のフォルダになります。

C:\Program Files\Antenna House\PDF Server V3

3. 通常、コピーを行う際、“このフォルダにはすでに「**svplic.dat**」が存在します。”という警告ダイアログが表示されます。これはすでに評価用のライセンスファイル（もしくは保守期間が切れたライセンスファイル）が存在するためです。この場合には、「上書きコピー」を行います。

4. スタンダード版/プロフェッショナル版の場合には、コントロールセンターを再起動すると正式版として起動します。

2.2.4. PDFコンバーターについて

PDF Serverをインストールする際、PDFコンバーターのショートカットファイルがスタートアップフォルダ内に作成され、ログオン後に自動で起動するように設定されます。通常使用する場合には、このままでも構いませんが、以下に示す状況ではPDFコンバーターの起動方法を手動で変更する必要があります。

- ▼ オフィス /アプリケーション変換を行わない場合
- ▼ クライアント OSなどでユーザーアカウント制御が有効な場合
- ▼ PDFサーバーを動作させるコンピュータでリモートデスクトップサーバーを動作させる場合

ここでは、それぞれの状況に応じた PDFコンバーターの起動方法の変更方法について説明します。

2.2.4.1. オフィス/アプリケーション変換を行わない場合

PDFコンバーターは Microsoft Officeや各種アプリケーションのドキュメントファイルを PDFファイルに変換するための常駐ソフトウェアです。従って、PDF Serverを利用してオフィス /アプリケーション変換を行わない場合には、PDFコンバーターは必要ありません。スタートアップフォルダからショートカットファイルを削除するだけで次回から自動で起動する事はなくなります。

また、利用したい時にはスタートメニューのすべてのプログラムから「Antenna House PDFServer V3.5」→「PDFコンバーター」を選択すれば手動で起動します。

2.2.4.2. クライアントOSなどでユーザーアカウント制御が有効な場合

Windows Vistaや Windows 7では、デフォルトでUAC(ユーザーアカウント制御)が有効になっています。そのため、ログオン後に PDFコンバーターが起動しようとするところで一旦停止して、ユーザーにこれを起動しても良いか否かを確認するダイアログが表示され、これに応答するまで機能することができません。毎回、PDFコンバーターが、起動する都度、このダイアログに応答していたのでは、使い勝手としてはあまり良くありません。

この場合には、「タスク スケジューラ(タスク)」に PDFコンバーターを起動するタスクを登録する事で解決します。設定方法の詳細については、次項「リモートデスクトップを利用する場合」を参照して下さい。

2.2.4.3. リモートデスクトップをご利用になる場合

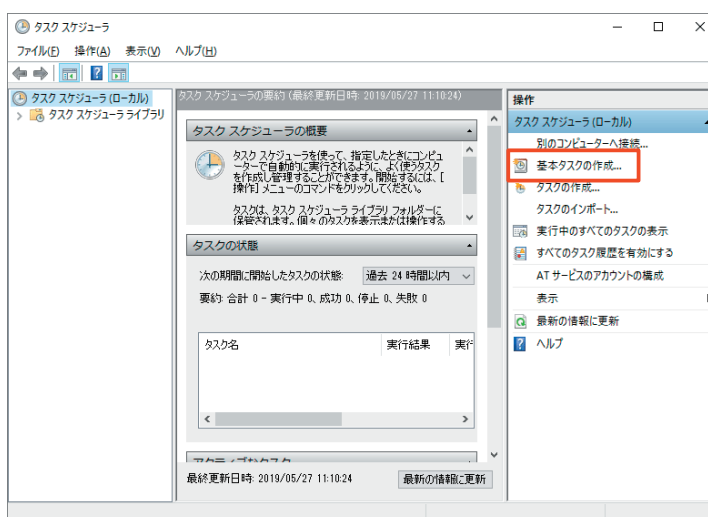
PDFコンバーターは、製品の仕様上、1台のコンピュータ上で1つしか動作(常駐)することが出来ません。リモートデスクトップを利用せず、コンソールから直接操作する分にはスタートアップフォルダにショートカットを入れておき、ログオンする都度起動させるだけで問題ありませんが、リモートデスクトップによってネットワーク上の端末がログオンする度に仮想デスクトップが起動する為、そのたびにスタートアップフォルダに保存されているアプリケーションが起動します。前にも述べたように PDFコンバーターは常駐型で、多重起動が出来ない仕組みとなっているので、ログオン後、暫く経つと仮想デスクトップ上で起動されたPDFコンバーターは自動的に終了しますが、その間にオフィス /アプリケーション変換処理が実行されると正常に変換出来ない恐れがあります。

これを回避するには、前項と同じく、「タスク スケジューラ(タスク)」にPDFコンバーターを登録する事で解決します。

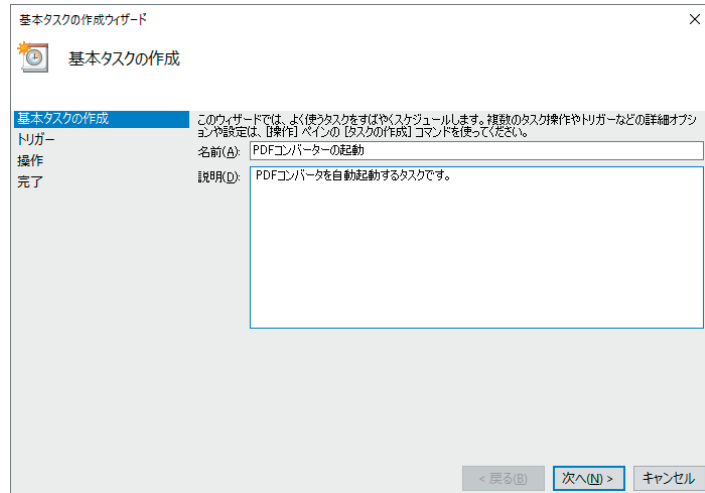
以下に Windows Server 2016上で使用している場合を例に設定方法を説明します。

予め、タスク スケジューラへ登録する前に「2.2.4.1. オフィス /アプリケーション変換を行わない場合」を参照して、スタートアップフォルダからPDFコンバーターのショートカットを削除しておきます。

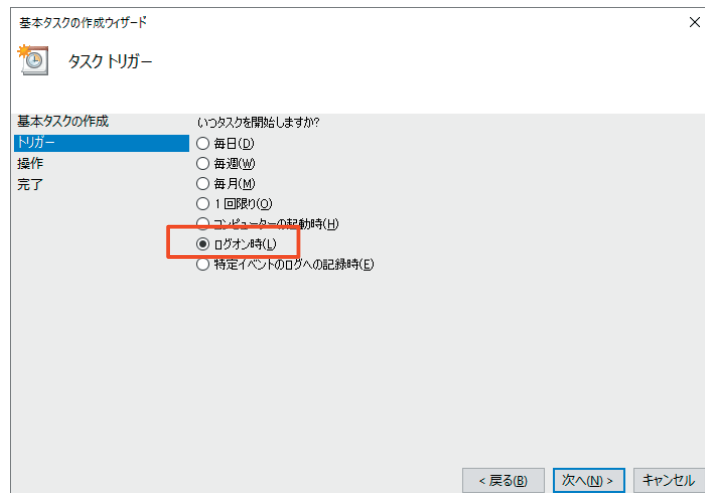
1. スタートメニューから「Windows管理ツール」→「タスク スケジューラ」を選択してタスク スケジューラを起動します。
2. タスク スケジューラが起動したら、一番右のペインにある「基本タスクの作成…」をクリックします。



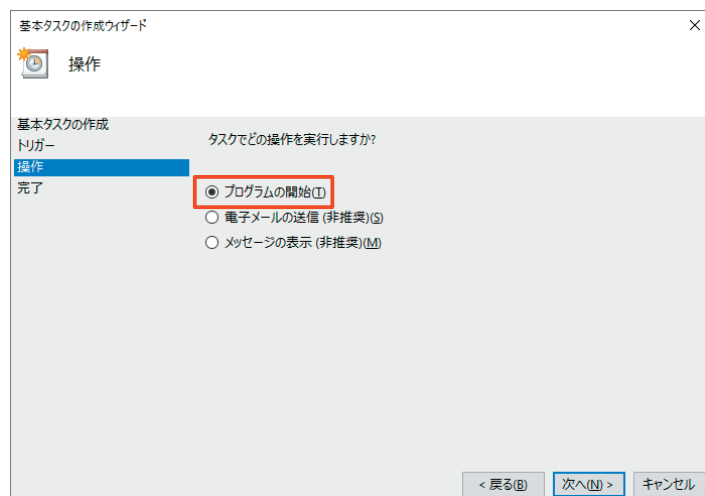
3. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「名前」と「説明」を自分が分かりやすいユニークなものを入力します。入力内容に関しては任意の内容で構いません。入力後、「次へ」ボタンをクリックします。



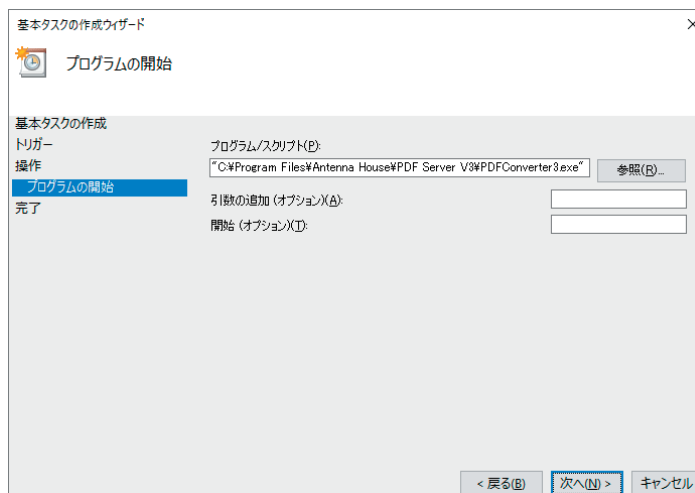
4. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「ログオン時」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



5. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「プログラムの開始」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



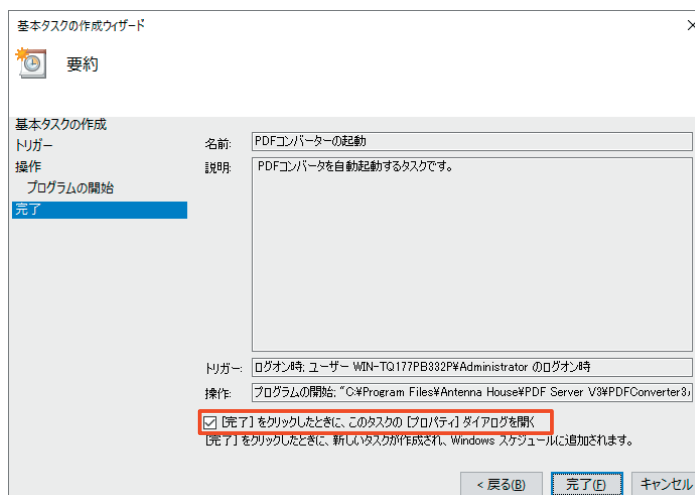
6. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「プログラム/スクリプト」を入力、または参照して「次へ」ボタンをクリックします。他の項目は入力しません。



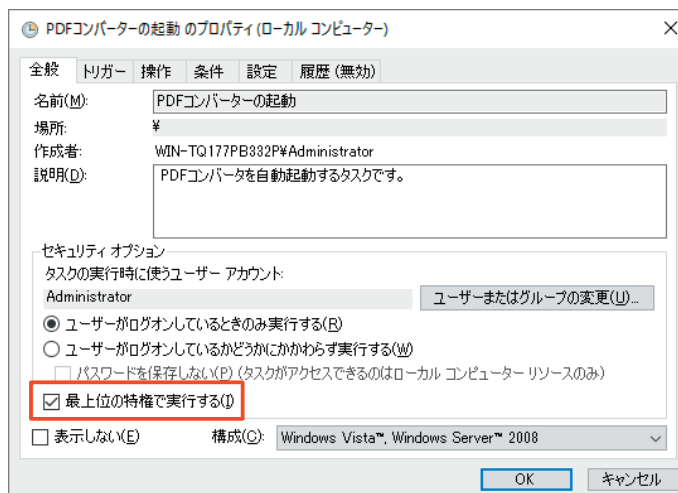
PDFコンバーターのパスはインストール時に変更していなければ以下の通りです。パス名にスペースが入っているため、入力時にはダブルクォーテーション(“)で囲む必要がありますので、注意して下さい。(「参照…」ボタンで選択した場合は自動的に付加されます。)

C:\Program Files\Antenna House\PDF Server V3\PdfConverter3.exe

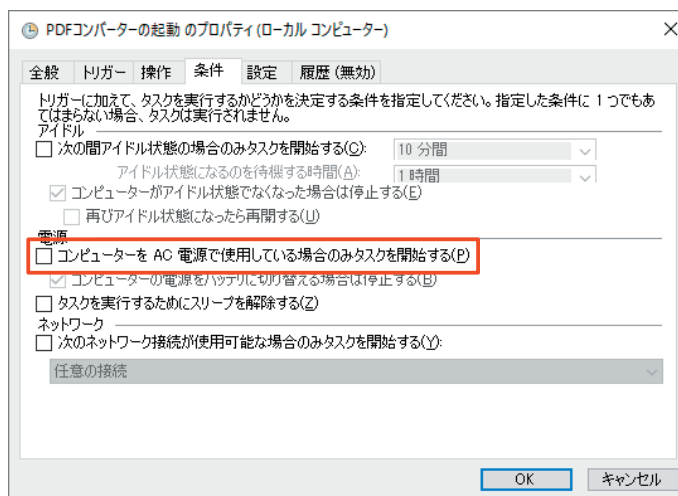
7. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「完了」をクリックしたときに、このタスクの「プロパティ」ダイアログを開く」にチェックを入れて、「完了」ボタンをクリックします。



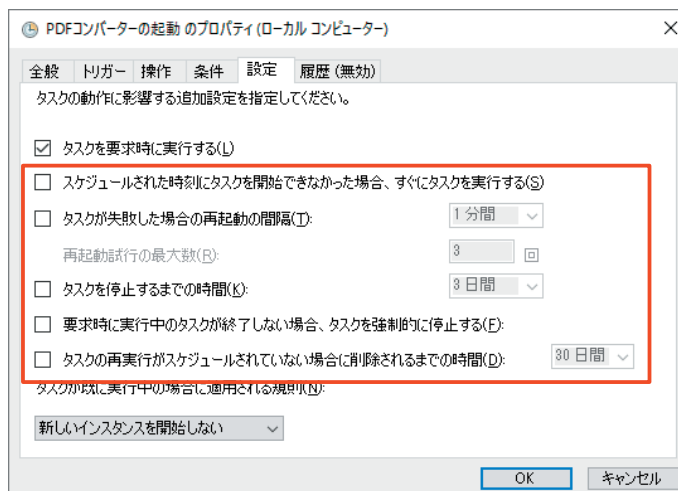
8. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「最上位の特権で実行する」にチェックを入れます。



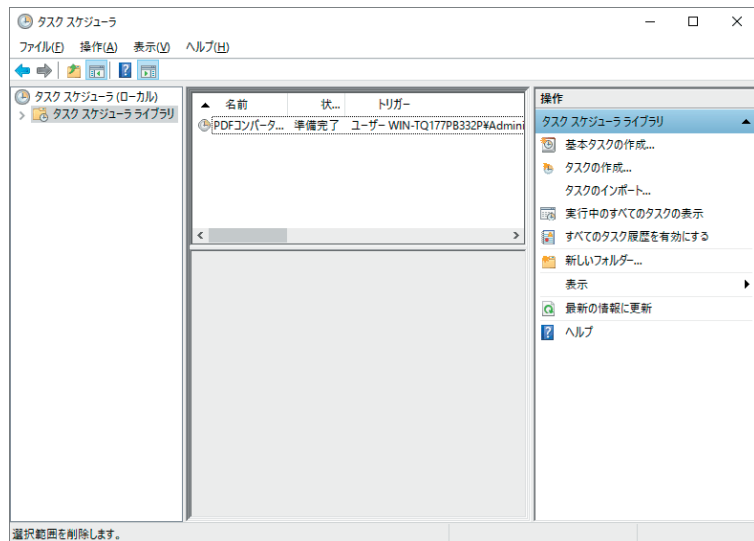
9. 「条件」タブをクリックし、「コンピューターをAC電源で使用している場合のみタスクを開始する」のチェックをはずします。



10. 「設定」タブをクリックし、「タスクを要求時に実行する」以外の項目のチェックを外して、「OK」ボタンをクリックします。



11. タスクスケジューラーのメイン画面に戻って一番左のペイン内の「タスク スケジューラ ライブラリ」をクリックすると、中央のペインに作成したタスクが表示されているのを確認して完了です。完了後、「2.2.4.1. オフィス /アプリケーション 変換を行わない場合」を参考にスタートアップフォルダからPDFコンバーターのショートカットを削除して下さい。

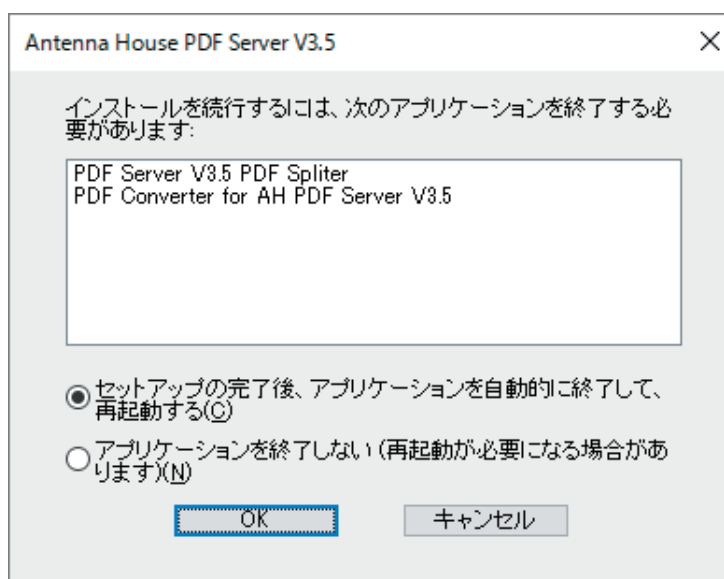


2.3. アンインストール

注意: アンインストール作業を行う前にすべてのアプリケーションが動作していないことを確認して下さい。動作しているものがあれば、すべてを終了した後、アンインストール作業を行って下さい。

2.3.1. PDF Serverのアンインストール

1. PDFコンバーター/PDFスプリッタが停止していることを確認します。これらが動作している場合には、タスクトレイにあるそれぞれのアイコンを右クリックして表示されるメニューから【終了】を選択して、終了させます。
2. コントロールパネル「プログラムと機能」を開いて表示されるリストから、「Antenna House PDF Server V3.5」を選択した後、「アンインストール」ボタンをクリックして、アンインストールを実行します。
※ PDFコンバータ/PDFスプリッタが動作している状態のままアンインストールを実行すると以下のダイアログが表示される場合があります。



このダイアログが表示された場合、以下の操作を行ってアンインストール作業を続けます。

- i 動作しているPDFコンバータ/PDFスプリッタを終了します。
 - ii ラジオボタン「アプリケーションを終了しない」を選択した後、【OK】ボタンをクリックします。
3. アンインストール作業の進行状況を示すダイアログが表示されるので、終了するまでの暫くの間、待機します。

2.3.2. PDF Driverのアンインストール

1. アプリケーションが起動していないことを確認します。もし、起動しているアプリケーションがあれば、すべてを終了させます。
2. コントロールパネル「プログラムと機能」を開いて表示されるリストから、「Antenna House PDF Driver 7.5」を選択した後、「アンインストール」ボタンをクリックして、アンインストールを実行します。
3. アンインストール作業の進行状況を示すダイアログが表示されるので、終了するまでの暫くの間、待機します。作業途中に「ファイル削除の確認」ダイアログが表示された場合、【OK】ボタンをクリックして選択したアプリケーション、及び全ての機能を削除して下さい。
4. アンインストール完了後、「メンテナンスの完了」画面が表示されます。【完了】ボタンをクリックして終了します。
5. 「メンテナンスの完了」画面で、コンピュータを再起動する必要があるとのメッセージが表示される/されないに関わらず、アンインストール作業終了後、一旦コンピュータを再起動します。

3. PDF Server について

ここでは PDF Serverについて、構成や動作のしくみ、変換方法について基本的な事について解説します。まずは PDF Serverがどのようなソフトウェアシステムであるかについて理解して下さい。

3.1 PDF Serverとは

PDF Serverはフォルダ監視型の PDF自動変換ソフトウェアです。さまざまなフォーマットのドキュメントを PDFや TIFF、JPEGに自動的に変換することができます。

▼入力ファイル

PDF Serverは以下のドキュメントを対象に PDF変換することができます。

• Microsoft Officeファイル

Microsoft Officeファイルのうち、Word、Excel、PowerPointの各ファイルをPDFファイルに変換することができます。変換を行うには、それぞれのファイル形式に対応するMicrosoft Office 2013/2016/2019ソフトウェアがインストールされている必要があります。PDF ServerはMicrosoft Officeのサーバーサイド機能を利用して変換を行います。

※ DOCX/PPTX/XLSX形式のOfficeファイルをPDFファイルに変換するには、Microsoft Office 2007以降が必要です。

• 一太郎ファイル

ジャストシステムの一太郎文書ファイル(拡張子:JTD)をPDFファイルに変換することが出来ます。変換を行うには、Microsoft Officeファイルの場合と同様、一太郎がインストールされている必要があります。

• アプリケーションファイル

アプリケーションファイルとは、PDF Serverの入力対象外のドキュメントにおいて、シェル印刷対応のアプリケーションを利用して変換を行う事が出来るファイルを言います。「シェル印刷」が出来るアプリケーションファイルは、ファイルのコンテキストメニュー(ファイルアイコンをマウスの右ボタンクリックして表示されるメニュー)内に「印刷」という項目が表示されるファイルです。ワープロソフトなどはほとんど対応していますが、グラフィック、DTPソフトやCADソフトなど、基本的に印刷実行時に印刷範囲を別途指定するなど、オプション設定が必要なファイルは対応していない事が多いので注意して下さい。

• 画像ファイル

ビットマップ(Windows)、JPEG、JPEG2000、PNG、1 ページしかないシングルページTIFFファイル、及び複数ページで構成されるマルチTIFFファイルをPDFファイルに変換する事が出来ます。ほとんどの場合は問題ありませんが、一部の形式(特にTIFFファイル)について扱えない場合があります。詳細については「ユーザーズマニュアル」の巻末の付録「PDF Serverの対応画像形式について」を参照して下さい。

• テキストファイル(TXT/XML)

テキストファイルもPDFファイルに変換可能です。ただし、対応している文字コードは、Shift-JIS、またはUTF-16のみです。これはテキストファイルが文字情報しか存在せず、特にWindowsの場合、Unicodeとの区別がつかないケースが多々あるためです。対応していない文字コードのテキストをPDF変換すると文字化けしてしまいますので注意して下さい。

• PDFファイル

PDFファイルは TIFFや JPEGへの変換も出来ますが、どちらかと言えば編集(セキュリティ付加やウォーターマークの設定など)を行う事がメインと言えます。

▼出力ファイル

PDF Serverは入力したファイルに対して以下のようなファイルに変換もしくは出力する事が出来ます。

- PDFファイル

PDF Serverで出力されるPDFは1.3(Acrobat 4.x)～1.7(Acrobat 8.x)に対応しています。(入力は1.7以前のものすべてです。)また、変換だけではなく各種編集(ヘッダ/フッタの追加、ウォーターマークの追加、OCRの実行など)も行う事が出来ます。Microsoft Office ファイル、一太郎ファイルやアプリケーションファイルの変換には、同梱の「Antenna House PDF Driver V7.5」を利用してPDF変換を行います。

- TIFFファイル

マルチTIFF及びシングルTIFFを出力できます。カラー画像処理方法や圧縮方法を設定できます。

- JPEGファイル

マルチTIFFやPDFなど複数ページのドキュメントも1ページずつJPEGに変換します。オプションでフォルダを作成してその中にJPEGファイルを作成する事も出来ます。

- テキストファイル

テキストファイルは出力されたPDFの文書情報や、OCR結果のテキストのみを出力します。OCRテキストについてはPDF Serverで実行されたOCRテキストのみ出力されます(他社製品やPDF Driverで作成したテキストは出力されません)

3.2. PDF Serverのシステム構成

PDF Serverは、以下に示すソフトウェアで構成されています。

- PDF Serverサービス
- PDFコンバーター
- PDF Server V3.5 コントロールセンター
- PDFスプリッター
- ログビューア
- 設定編集ツール
- PDF Driver
- PDF Serverコマンド [プロフェッショナル版/コマンド版]

以下、それぞれのソフトウェアについて説明します。

PDF Serverサービス (AH PDF Server V3 Service)

PDF Serverの中核となるWindowsサービスソフトウェアです。通常のアプリケーションソフトウェアと異なり、専用の管理コンソールから起動や停止を行います。また、PDF Serverの場合には、PDF Server V3.5 コントロールセンターからも起動や停止が可能です。このソフトウェアはバックグラウンドで動作するため、管理コンソールやコントロールセンターを使用しないと動作しているかどうか分かりません。

※ PDF Serverサービスは、PDF Serverの実際の処理の内、Officeファイル/一太郎ファイル/アプリケーションファイルのPDFファイルへの変換以外のすべての処理を担っています。

PDFコンバーター

PDFコンバーターは、以下の2つの機能を担う常駐プログラムで、起動後、タスクトレイにアイコンとして表示されます。

1. Officeファイル/一太郎ファイル/アプリケーションファイルのPDFファイルへの変換を行う

Microsoft Windowsは、セキュリティを維持するため、サービスからアプリケーションを起動することができません。PDFコンバーターは、この制限を回避するための手段として機能し、PDF Serverからの指示によってOfficeファイル/一太郎ファイル/アプリケーションファイルのPDFファイルへの変換動作を行います。(PDFコンバーターが動作していない状態で、Officeファイル/一太郎ファイル/アプリケーションファイルのPDFファイルへの変換を行うとエラーを生じ、変換動作が行われません。)

2. PDF Serverが動作中に表示されるダイアログに自動応答する

Officeファイル /一太郎ファイル /アプリケーションファイルの PDFファイルへの変換を行う際、セキュリティが設定されているなどするとダイアログが表示され、ユーザーによって操作されるまで処理が停止してしまうことがあります。PDFコンバーターは、予めクリックするダイアログのボタンを登録しておき、これが表示された際に自動的にこれをクリックして応答させることで、処理の中断を回避するものです。

PDF Server V3.5 コントロールセンター

PDF Serverサービスの開始 / 停止、変換 / タスクの設定、動作状況のモニタなどを行う制御アプリケーションです。このアプリケーションは、設定や状況のモニタを行うだけで、変換処理には全く関係がありません。リアルタイムに近い形でのモニタリングが可能です。その分システムリソースを消費するため処理速度の低下の一因となります。特に必要がなければ、普段は閉じておくことを推奨します。

PDFスプリッタ

複数ページを持つ PDFファイルについて、ファイル中の QRコードを区切りとしてファイルを分割する常駐型の支援ソフトウェアです。イメージスキャナなどを用いて一括して取り込んで作成された PDFファイルを文書毎に独立した PDFファイルに分割して監視フォルダに投入する際に利用します。

ログビューア

PDF Serverが動作中に出力するログを表示するためのアプリケーションです。

設定編集ツール

PDF Serverで用いる、変換設定を作成 / 編集するアプリケーションです。PDF Serverでは、監視フォルダに処理対象となるファイルと同じ名称の変換設定ファイルを同時に投入することで、対象となる監視フォルダに設定されている変換設定ではなく、投入した変換設定ファイルに従った変換処理を行うことができます。このアプリケーションを用いて、その際に利用する変換設定ファイルを作成することができます。

PDF Driver

Officeファイル / 一太郎ファイル / アプリケーションファイルの PDFファイルへの変換を行う際に使用する PDF生成仮想プリンタドライバです。PDF Serverでは、対象となる文書ファイルをそれら作成したアプリケーションを使って、PDF Driverで印刷することでPDF変換を実現しています。PDF Serverに付属しているドライバ「Antenna House PDF Driver Ver.7.5」は、PDF Server専用版です。アプリケーションからの印刷を実行する際に利用することはできますが、その場合、評価版として動作し、出力される PDFファイルに透かしが設定されます。

※ 正常に動作しなくなる可能性がありますので、アンテナハウスの他の製品に付属している「Antenna House PDF Driver Ver.7.5」をインストールしないで下さい。

PDF Serverコマンド

PDF Serverコマンドは、PDF Serverの機能をコマンドプロンプトや他のアプリケーションから起動できるようにしたアプリケーションソフトウェアです。PDF Serverが持つ機能を別のシステムから呼び出して使用したい場合などに利用します。

プログラム名は「PdfsvCmd300.exe」で、コマンドプロンプトで「PdfsvCmd300」と入力して、Enterキーを押下するとコマンドヘルプが表示されます。

※ インストール時にシステム環境変数「Path」にPDF Serverのインストールパスを追加しているため、基本的にカレントディレクトリの場所によらず実行できます。

単純に PDF変換を行うだけであれば、変換対象となるファイルを指定するだけで同じフォルダに PDFファイルを出力できます。出力先の指定、OCR、ドライバの設定なども指定することができます。また、PDF Serverサービスで用いている変換設定を利用することも可能です。ただし、結合処理だけは変換と同時にできないため、結合を行うときだけは専用のオプションスイッチと結合対象となる PDFファイルを指定して実行します。

3.3. ソフトウェア間の連携について

PDF Serverの各ソフトウェアは、以下に示すように適宜連携しながら動作しています。

基本的にそれぞれのソフトウェアは、独立しており、ソフトウェア間では、PDF Driverを除き TCP/IPで通信して連携動作しています。PDF Serverの各ソフトウェアで用いている通信ポートは以下の通りです。PDF Serverを正常に動作させるためには、これらの通信ポートを使用していないことが必要になります。

IPアドレス	ポート番号	通信内容
127.0.0.1	9901	サービス
	9902	コントロールセンター
	9903	マネージャ
	9904	コンバーター

※ 環境の都合により上記通信ポートが利用できない場合には、弊社サポート窓口にご相談下さい。

3.4. エディションと評価版

3.4.1. エディションの種類

PDF Serverには、幾つかのエディションが用意されております。

エディション	機能概要	同時起動タスク数
スタンダード版	PDF Serverの標準的な機能であるフォルダ監視によるファイル変換機能を利用できます。	5
プロフェッショナル版	スタンダード版の機能に加え、コマンドライン変換機能、IN/OUTモードを利用できます。	無制限
コマンド版	プロフェッショナル版のコマンドライン変換機能を独立させたものです。PDF Serverの変換エンジンをコマンドプロンプトから利用できます。一部の機能については、マルチプロセスに対応しています。	なし

3.4.2. 評価版と正式版

PDF Serverには、評価版と正規版があります。これは、製品導入前にその機能などを実際にお試しいただくことで、Webサイト・製品カタログにあるような情報や営業担当者とのやり取りだけでは分からないような、製品についての細々としたことをご理解いただき、導入後に生じるトラブルを減らすことを目的としています。

PDF Serverプロフェッショナル版とスタンダード版の評価版と正規版のインストーラプログラムには、ソフトウェア的な内容の違いはありません。これらについてはライセンスファイルの内容によって、評価版あるいは正規版のどちらで動作するかが決定します。したがって、初めてこれらをインストールする場合、必ず評価版としてインストールされます。

※ コマンド版については評価版を用意しておりません。コマンド版を評価される際には、プロフェッショナル版の評価版にて代用していただくこととなります。

評価版は、上に述べたことを目的として用意したものです。製品としての動作や出力結果については、正規版と全く同じですが、以下の点が異なります。

- PDF Server 評価版を使用していることを明確にするため、画面の一部に「評価版」と表示されます。
- PDF Server 評価版はインストールした日から起算して30日間、動作させることができます。この期間を経過すると警告メッセージなどを表示し、動作させることができなくなります。

4. PDF Server の運用について

お客さまが運用を予定している処理内容によって、PDF Serverを動作させる環境のシステム構成を設計する必要があります。不適切なシステム構成で運用した場合、日常の動作に支障を来す可能性が高くなります。ここでは、どの様なことに注意してシステム構成をすべきかについて解説します。

4.1. PDF Serverを動作させるコンピュータのハードウェアとその環境について

PDF Serverを快適に動作させるためには、以下に示すようなシステム構成が推奨されます：

画像のPDF変換 /OCR処理を主目的とする場合：

CPU:	なるべく高速なマルチコアプロセッサ
メモリ:	8GB以上
その他:	PDF Serverとこれに必要なソフトウェア以外をインストールしない(PDF Server専用機として用いる)

MS-Office/アプリケーション文書のPDF変換を主目的とする場合：

CPU:	なるべく高速なマルチコアプロセッサ
メモリ:	2GB以上
その他:	PDF Serverとこれに必要なソフトウェア以外をインストールしない(PDF Server専用機として用いる)

安定して動作させることを考えると以下に示す事項は順守して下さい。必ず守らなければならないわけではありませんが、場合によっては、システム全体の動作が不安定になり、サポートできない場合があります。

- ・他のシステム(特にWebシステム)を同じコンピュータ上で動作させない。
- ・SQL ServerやOracleなど、エンタープライズ系のRDBエンジンを同じコンピュータ上で動作させない。
- ・常駐ソフトウェアはできるだけ利用しない。

コマンドライン実行機能を使って複数の処理を同時に実行する場合：

CPU:	なるべく高速なマルチコアプロセッサ
メモリ:	8GB以上
その他:	PDF Serverとこれに必要なソフトウェア以外をインストールしない(PDF Server専用機として用いる)

コマンドライン実行機能により、並行して複数の処理を同時に行うことができます。PDF変換はシステムに大きな負荷をかける処理であるため、複数の処理を同時に実行する場合、以下の条件内に収まるようにすることを推奨しております：

- コンピュータに搭載されているCPUのコア数 - 1 \geq 同時実行数
- コンピュータに搭載されている物理メモリの総量 \geq 同時実行数 \times 3GB

4.2. 運用規模の推定

1台(1ライセンス)のPDF Serverが、1日に処理可能なファイル数は、使用するシステムの処理速度にもよりますが、ある程度数が決まっています。したがって、実際に利用される状況を勘案し、利用するシステム(ライセンス)の数を決定する必要があります。

PDF Serverがファイル1つをPDF変換するための平均時間(変換時間+待機時間)は、約15秒程度です。(これは、対象となるファイルの種類や大きさ/ページ数や変換設定の内容によっても異なります。この数値は、オフィス/アプリケーション文書をPDF変換する時の場合です。画像ファイルの場合にはファイルサイズや内容にもよりますが、2倍の約30秒をおおよその目安として計算して下さい。)

PDF Serverで、時間を要する処理として、OCR、Office/アプリケーション変換(Officeソフトウェアなどの起動に時間を要するため)、結合処理などです。また、Office/アプリケーション変換については、その機構上の制限によりマルチタスクでの変換処理を行うことができません。このようなことから、1日のサイクルで考えた場合、1時間におよそ240ファイル程度の処理を行うことになります。一般的な勤務時間である9:00～18:00までの9時間動作させたとした場合、2,160ファイル程度、24時間では、5,760ファイル程度を処理できることになります。

これから、PDF Serverを利用するユーザー数とそのユーザーがどの程度の頻度で変換処理を行うかを考えます。ここであげる人数は、PDF Serverを利用するユーザー数で組織に所属する総数ではありません。変換処理に即時性を求めないのであれば、ここで上げた台数以下でも運用は可能です。このように、運用する前には、ある程度の事前調査や利用者に向けたヒアリング調査が必要になります。

10人程度が、1時間あたり20ファイルほどの頻度で利用する
→1台で対応可能です

100人程度が、1時間あたり20ファイルほどの頻度で利用する
→2,3台程度を想定する必要があります

1,000人程度が、1時間あたり20ファイルほどの頻度で利用する
→5台程度を想定する必要があります

また、変換方法を工夫することによっても、余裕を作ることも可能です。たとえば、業務時間(AM 9:00～PM 6:00)と就業後(PM 6:00～AM 8:00)の2つに分け、緊急性が低いものは就業後に処理させることで、サーバーに対する負荷を平均化させます。

※ この方法をとった場合、就業後に処理させるファイル数が、3,000ファイルを超えると一晩では処理できなくなりますので、注意が必要です。

4.3. メンテナンスについて

PDF Serverは、その仕様上、時々メンテナンスを行う必要があります。PDF Serverを安定して動作させるためにも留意して下さい。

- ・定期的にコンピュータを再起動する

特に Office/アプリケーション文書ファイルの PDF変換を行っている場合には、1日1回程度、コンピュータを再起動することを推奨します。これは、Microsoft Officeやアプリケーションを起動する際に何らかのトラブルが生じた場合、システムが停止してしまう恐れがある為です。Microsoft Officeや各種アプリケーションは、PDF Serverとは異なるプロセスで動作させるため、これらで何か異常が発生しても PDF Server側から検知することができません。メモリ上に何らかのオブジェクトが残っているとそれがボトルネックとなり、徐々に速度低下などが起こり、最悪な場合、システムがハングアップして停止してしまうこともあります。そうならないようにするためには、PDF Serverを利用しない時間帯に電源を落としたり、深夜など決められた時刻にOSを再起動するなどします。このような処置を施すことで、トラブルを確実に減らすことができます。

5. PDF Server の基礎知識

PDF Serverは、フォルダ監視型の自動ドキュメント変換ソフトウェアです。これを運用するには、その動作方法と設定について知る必要があります。設定方法や考え方は、それぞれ、これをどの様に運用するかによって異なります。これを見誤ると期待した能力を発揮させることも出力結果も得ることができません。ここでは、PDF Serverを利用するに当たり、最低限知っておくべき事項について説明します。

5.1. タスクについて

PDF Serverは、「タスク」と呼ばれる設定を行うことで運用します。タスクは、最低1つ以上設定する必要があり、その設定数に上限はありません。設定するタスクの数を増やせば、PDF Serverの起動／停止に要する時間は、タスク数に比例して増加します。また、同時に動作させるタスク数に比例してシステムリソースの消費量が増加するため、処理速度の低下を招きますので、コンピュータの処理能力と変換頻度に応じた適切な設定を行う必要があります。

タスクとは、変換についてのファイルの入出力についての動作です。変換／編集については、タスクに関連付けられた「変換設定」によって設定します。

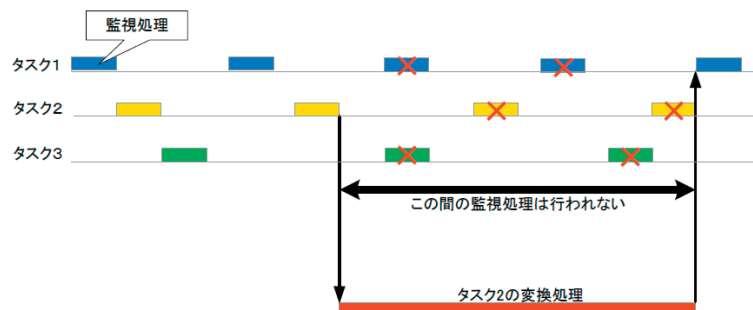
タスクには、以下の項目を設定する必要があります。

- ・タスクの名称
- ・使用する変換設定
- ・監視フォルダのパス
- ・監視時間
- ・一度に変換を行うファイル数
- ・処理対象ファイルの種類
- ・出力ファイルの種類

監視フォルダは、サブフォルダを含めて同じ階層にあるフォルダをタスク間で共有することができません。例えば、ドライブのルートディレクトリ(「D:¥」など)を監視フォルダに設定してしまうとそのドライブにあるいかなるフォルダも他のタスクの監視フォルダに設定できなくなります。一方、出力フォルダについてはタスク間で共有可能です。

タスク設定で特に重要なのは、「監視時間」と「ファイル検索数」です。タスクを1つだけしか設定せずに運用するのであれば特に問題が発生することがありませんが、複数のタスクを稼働させる場合には注意が必要になります。

PDF Serverは、監視フォルダを監視している状態(変換処理を行っている状態)には、マルチスレッドで監視を行っています。しかし、動作中のタスクが変換対象のファイルを見つけるとそこで他のタスクを一旦ペンディング(待ち)状態にし、見つめられたファイルの変換作業が終了するまで監視動作を行いません(監視動作を一時停止状態にします)。変換処理が終了すると、監視動作はペンディング状態から解除され、動作中のすべてのタスクについて監視動作を再開します。ここでの変換動作は、基本的に「早い者勝ち」となります。



監視動作がこのような仕様となっていることを踏まえると、タスク数が増えるに連れ、よく考えて設定しないと何時までたっても変換処理が始まらない可能性も出てきます。特にすべてのタスクについて同じ監視時間を設定するとそのような事態が発生する可能性が高くなります。これは、同時に監視動作が行われる場合、最初に内容のチェックを行った監視フォルダにファイルが存在すると「早い者勝ち」という原則によってその他の監視フォルダについて内容のチェックが行われない滋養協となるからです。そのため、監視間隔に余裕を持ってタスクが相互に監視動作を行えるような時間設定をすることが不可欠になります。そして、出来る限り1分間に3タスク以内の監視動作となるように調節して下さい。例えば、5タスク以上を設定し、すべてのタスクについて監視時間を10秒に設定した場合、CPUの使用率が常時ほぼ100%となり、高い負荷がかかった状態での動作となってしまいます。このような状態では、変換処理を連続して安定して行うことが困難です。（監視時間間隔をより短くすれば、その分常に監視動作を行うようになり、システムへの負荷が増大することとなります。）

一度に変換を行うファイルの数は、「ファイル検索数」で設定します。（初期状態では、100に設定されています。）一度に多数のファイルを監視フォルダに投入するような使い方を想定している場合には、検索数を減らすことで、変換処理を平均化することができます。この「ファイル検索数」は、「ファイルの結合」を対象とした設定です。（1回の検索数を「5ファイル」に固定すると1度の処理で5ファイル以上のファイルを結合することができません。）結合処理を行わないタスクであれば、検索数を数ファイル程度に収めることでタスク間の処理ファイル数のばらつきを抑えることができるかと思われます。これについては、運用状況に応じて調整してみてください。

5.2. 基本的なファイル変換の流れ

PDF Server は変換するファイルによって変換方法が異なります。ここでは入力ファイル別に主な設定部分と変換順序について説明します。

5.2.1. テキストファイル変換

テキストファイルは以下の流れで変換します。



それぞれのフェーズでは以下の設定を利用します。

【テキスト→PDF変換】

設定は[タスク基本情報] → [テキスト変換設定]で行います。テキストファイルはワープロデータと異なり、文字情報しかなく、使用するフォントや用紙などの情報を一切持ちません。そのため、最低限の文字情報を設定します。

【PDF編集】

設定は[PDF ファイル設定]以下のメニューで行います。テキストファイルに限らず、すべての入力ファイルを PDF に変換する場合の最終的な設定となります。

5.2.2. イメージファイル変換

ビットマップや TIFF、JPEG、PNG、JPEG2000 などのイメージファイルは以下の流れで変換を行います。



変換処理の流れを統一化するため、一度プレーンな TIFF ファイルに変換します(画像の解像度やサイズなどは変更しません)

その後、OCR を行う場合は OCR 処理を実行し、マスク処理を行う場合はマスク処理を実行します。そして PDF に変換し最後にテキストファイル同様に PDF の編集を行います。

【イメージの設定】

イメージファイルの変換設定は TIFF ファイルのみ行えます。それ以外のイメージは画像イメージそのままに PDF に変換を行います。TIFF ファイルは [タスク基本設定] → [変換出力設定] で行う事が出来ます。

【OCR 設定】

イメージファイルと PDF ファイル[※] は OCR を行う事が出来ます。OCR とはイメージから文字を読み取って、出力 PDF ファイルの上に文字情報を重ねてあたかもそこに文字があるような感じで透明なテキストを置きます。これにより PDF ファイルがテキスト検索を出来るようになります。設定は [OCR 設定] 以下で行います。

※ 設定により対象となる PDF ファイルは、以下のいずれかとなります。

- ・ 画像だけからなるページを持つ PDF ファイル
- ・ 全ての PDF ファイル(但し、元の PDF ファイルにあったテキストやベクトルデータが失われます。)

【マスク設定】

マスクとはイメージの一部を塗りつぶして見えなくする処理の事です。[タスク基本情報] → [マスク設定] で行います。

5.2.3. オフィスファイル変換

Microsoft Office のうち、「Excel」、「Word」、「PowerPoint」各ファイルは以下の流れで変換します。ただし、変換にはそれぞれのソフトウェア（Office 2013/2016/2019、64-bit版の利用を推奨）が必要となります。



PDF 変換には Microsoft Office ソフトウェアを利用して PDF Driver で変換(出力)を行います。この処理は PDF コンバーターで行うため、PDFコンバーターが起動(常駐)している必要があります。

【オフィス変換設定】

オフィス変換設定は [タスク基本情報] → [オフィス変換設定] 以下で行います。Excel/Word/PowerPoint それぞれ個別に設定があります。

【PDF Driver設定】

オフィス / アプリケーション変換で使用する PDF Driver は Driver 設定にて設定を行う事が出来ます。詳細は PDF Driver の設定マニュアルで確認してください。設定は [タスク基本情報] → [プリンタドライバ設定] で行います。PDF Driver で設定されている設定がプリセットされ、選択されたものが利用されます。

5.2.4. アプリケーション変換

各種アプリケーションで作成されたファイルは以下の流れで行います。



オフィスファイルと同様、変換にはそれぞれのファイルを作成したソフトウェアが必要となります。

アプリケーション変換は、PDF Driverを利用して、文書を作成したアプリケーションから印刷を行うことでPDFへ変換しています。この処理はPDFコンバーターで行うため、PDFコンバーターが起動(常駐)している必要があります。

【アプリケーション変換設定】

変換するアプリケーションの種類を設定するのは [タスク基本情報] → [アプリケーション変換設定] で行います。設定は拡張子を登録することで行います。イメージファイルは登録できませんが、テキストファイルとオフィスファイルの拡張子は警告が出ますが登録可能です (赤文字で表示されます)。アプリケーション変換は、汎用的な処理であるため個別の詳細な設定は行う事が出来ません。

注意: 変換対象の Office をインストールし、「入力ファイル設定」で対象となるオフィスファイルを選択した状態において、アプリケーション変換設定でも Office ファイルの拡張子を登録した場合、アプリケーション設定のほうが優先されますので注意してください。

5.2.5. PDF 変換

PDF は基本的に OCRと PDF編集を以下の流れで行います。



PDFの OCRは基本的に「画像ファイル」が1枚だけで構成されているファイルが対象です。(主にスキャナで出力したものです。)対象外のPDFも一応OCRが可能ですが、この場合は一度ビットマップに変換してから行うので、時間がかかり、場合によっては出力されるPDFファイルのサイズがかなり大きくなります。

5.3. 自動ログオンと再起動

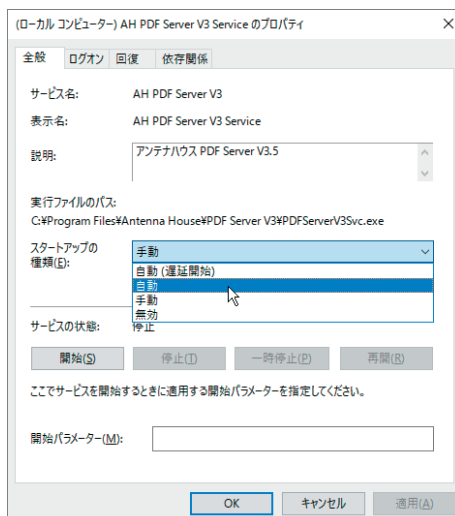
5.3.1. 自動ログオンとPDF Serverの自動起動

PDF Serverにおいて、オフィス /アプリケーション変換を行う場合はログオンした状態でないと実行する事は出来ません。サーバー OSではデフォルトで自動ログオンする事が出来ないため、日常の運用の中で再起動を自動で行うケース(Windows Updateなども含みます)が存在する場合は自動ログオンと PDF Serverの自動起動の設定を行う必要があります。なお、PDFコンバーターの自動起動も必要ですが、こちらについては「2.2.4. PDF コンバーターについて」を参照して下さい。

▼ PDF Serverの自動起動

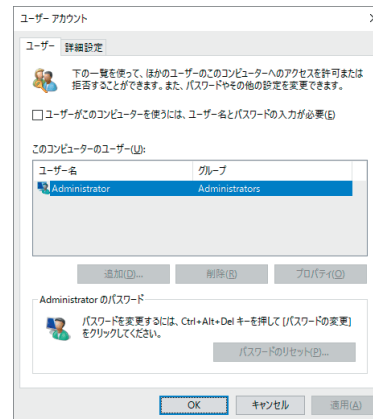
PDF Server の本体はサービスなので、こちらを自動起動にします。

1. サービスの管理コンソール([スタートメニュー] → [Windows管理ツール] → [サービス])を開きます。
2. サービス「AH PDF Server V3 Service」をダブルクリックするか、マウスの右ボタンクリックで表示されるメニューから「プロパティ」を選択して開きます。
3. 「全般」タブをクリックし、「スタートアップの種類」で「自動」を選択して「OK」ボタンをクリックします。

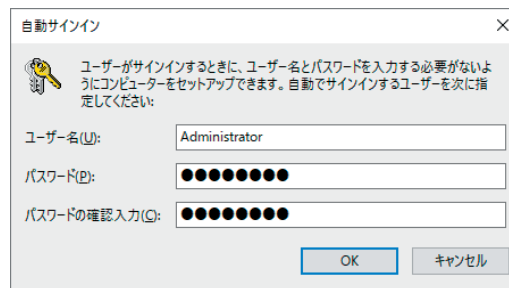


▼自動ログオン

1. スタートメニューの「ファイル名を指定して実行…」を選択し、表示されたダイアログの「名前」の入力エリアに「control userpasswords2」と入力して、「OK」ボタンをクリックします。
2. 以下のダイアログが表示されるので、「ユーザーがこのコンピューターを使うには、ユーザー名とパスワードの入力が必要」のチェックを外して「OK」ボタンをクリックします。



3. 以下のようなダイアログが表示されるので、ユーザー名とパスワードを入力して「OK」ボタンをクリックします。エラーが表示されなければ完了です。



5.3.2. 再起動

オフィス /アプリケーション変換を行うと、別プロセスで該当するソフトウェアを起動します。この場合、個々のソフトウェアは PDF Serverの管理下にはないため、何かトラブルが起こった場合はユーザーが手動で確認する必要があります。また、リソースの開放が不十分だった場合、動作に対して徐々に影響が出てくる可能性があります。場合によってはそれが原因で PDF Server 自体も停止してしまいます。そのような事を未然に防ぐ意味で運用サイクルに自動再起動や PDF Serverサービスが停止してしまった場合のリカバリを行う方法を説明します。

注意: 自動で再起動を行う時はPDF Serverが変換処理を行っていない時間に行われるように設定して下さい。

▼自動再起動

OSを任意のタイミングで自動的に再起動させるには、タスク スケジューラと Microsoft社が公開している再起動用 VBスクリプト(CD-ROM版にもダウンロード版にも収録しています) を組み合わせて使用します。

1. 再起動用 VB スクリプト「restart.vbs」と起動用バッチファイル「restart.bat」を任意の場所(例:C:\)にコピーします。
2. 起動用バッチファイル「restart.bat」をメモ帳などのテキストエディタで開き、以下のように再起動用VBスクリプトのパスと、そのサーバー名を書き換えます。

```
cscript c:¥restart.vbs /S [サーバー名] /R
```

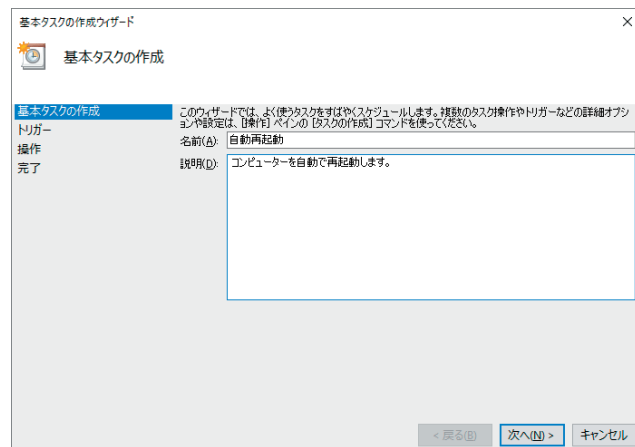
↑
①

↑
②

- ① 再起動用VBスクリプト「restart.vbs」のフルパス
- ② この再起動用VBスクリプトを起動するサーバー名(コンピューター名)
サーバー名は[コンピューター] → [プロパティ]で表示されるダイアログの「コンピューター名」になります。
3. スタートメニューから「Windows管理ツール」→「タスク スケジューラ」を選択してタスク スケジューラを起動します。
4. タスク スケジューラが起動したら、一番右のペインにある「基本タスクの作成…」をクリックします。

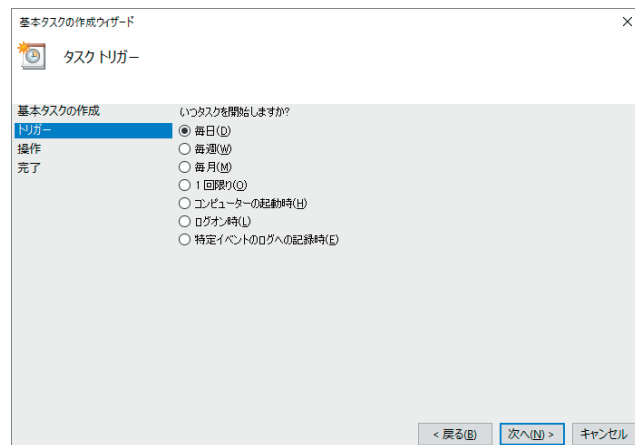


5. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「名前」と「説明」を自分が分かりやすいユニークなものを入力します。

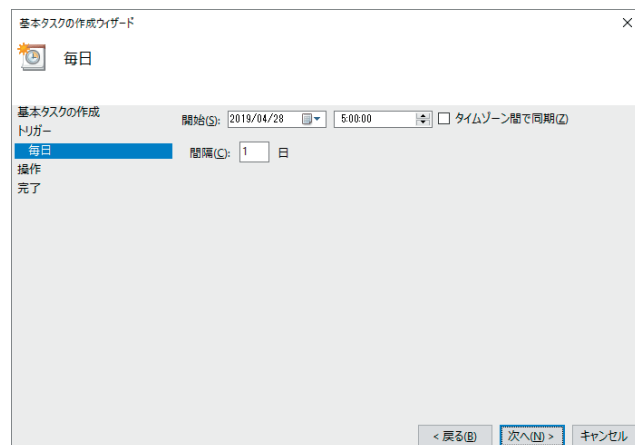


入力内容に関しては任意の内容で構いません。入力後、「次へ」ボタンをクリックします。

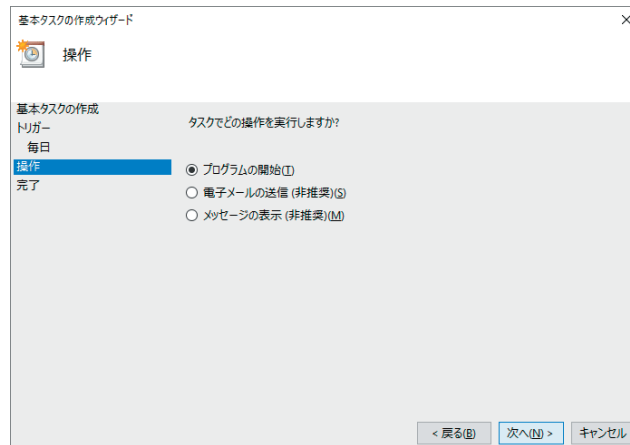
6. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「毎日」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



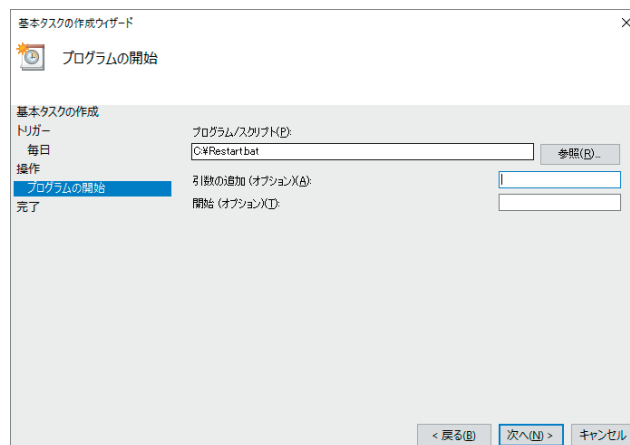
7. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「開始」の日付(設定当日で構いません)と再起動する時刻を入力して、「次へ」ボタンをクリックします。



8. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「プログラムの開始」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。

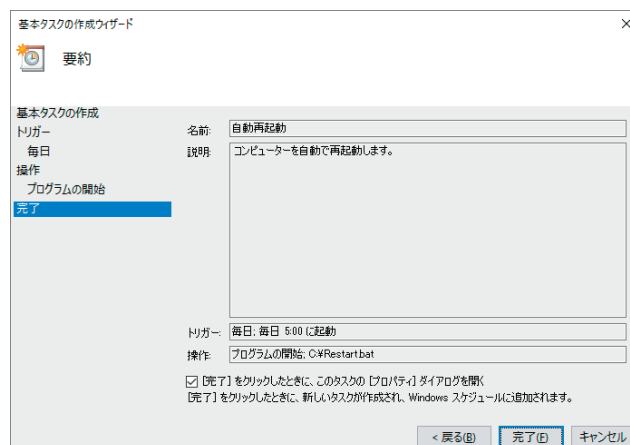


9. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「プログラム/スクリプト」に再起動バッチファイルパスを入力、または参照して「次へ」ボタンをクリックします。

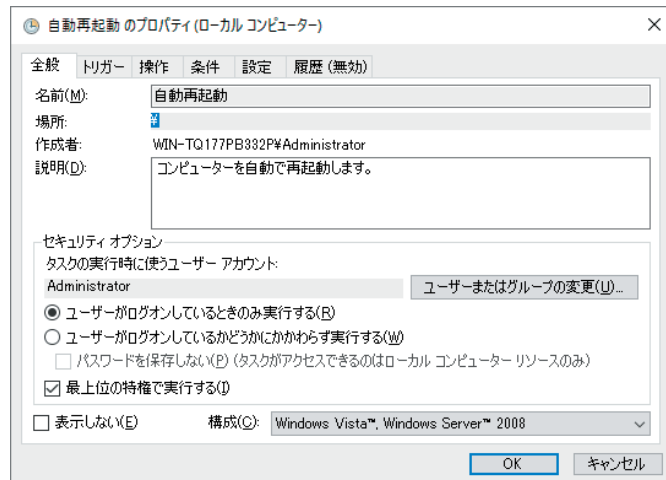


他の項目は入力しません。パス名にスペースが入っている場合は入力時にはダブルクォーテーション(“)で囲む必要がありますので、注意して下さい(「参照…」ボタンで選択した場合は自動で付加されます)

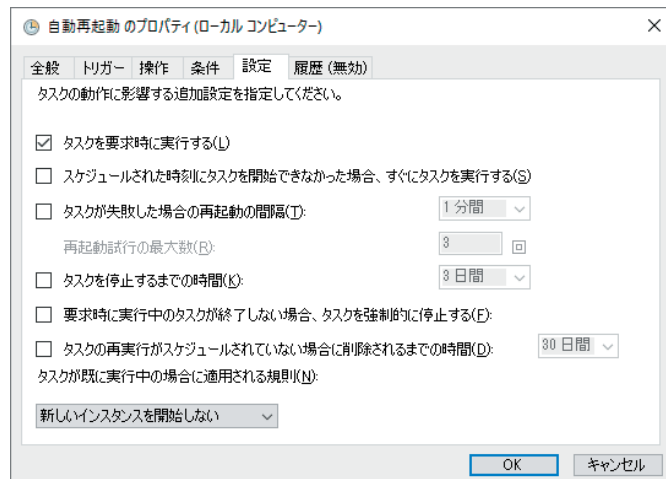
10. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「[完了] をクリックしたときに、このタスクの[プロパティ] ダイアログを開く」にチェックを入れて、「完了」ボタンをクリックします。



11. 以下のようなウィンドウが表示されるので、「最上位の特権で実行する」にチェックを入れます。



12. 「設定」タブをクリックし、「タスクを要求時に実行する」以外の項目のチェックをはずして、「OK」ボタンをクリックします。



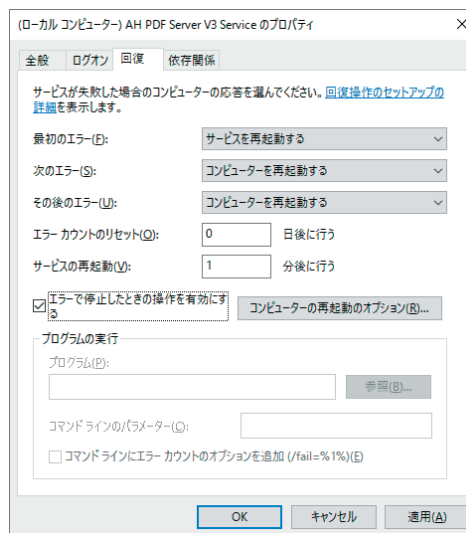
13. タスクスケジューラーのメイン画面に戻って一番左のペイン内の「タスク スケジューラ ライブラリ」をクリックすると、中央のペインに作成したタスクが表示されているのを確認して完了です。

▼サービス停止による再起動

PDF Serverサービスは、リソースの都合などの外的要因により異常停止するケースがあります。この場合、アプリケーションと異なりエラーで停止したかどうかはコントロールパネルやサービスの管理コンソールなどを確認しないとわかりません。状況によっては再度「開始」しても、すぐに停止してしまう可能性もあります。

そのため、PDF Serverサービスがエラーで停止した場合、自動で再起動する方法を説明します。

1. サービスの管理コンソール([スタートメニュー] → [Windows管理ツール] → [サービス])を開きます。
2. サービス「AH PDF Server V3 Service」をダブルクリックするか、マウスの右ボタンクリックで表示されるメニューから「プロパティ」を選択して開きます。
3. 「回復」タブをクリックし、「アカウント」を選択します。「最初のエラー」に「サービスを再起動する」を、「次のエラー」と「その後のエラー」には「コンピューターを再起動する」を選択します。そして、「エラーで停止した時の操作を有効にする」にチェックを入れて「OK」ボタンをクリックします。



6. タスク設定の テクニック

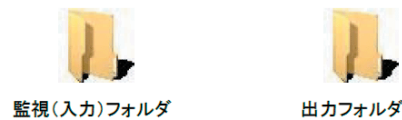
タスク設定には単独で機能するものと、他の設定に影響されて機能したり機能しなかったりするものなどがあります。PDF Serverのタスク設定ではある程度、柔軟に設定が出来るように極力エラーや警告を出す事はしていませんが、その分状況によってどういう動作になるのかはある程度経験も必要です。ここでは、タスク設定を行うに当たって特に知って欲しい事柄について説明します。

6.1. IN/OUT モード

IN/OUTモードとは通常の監視フォルダと出力フォルダを設定する方式ではなく、監視フォルダのみを任意のパスに設定し、その直下に必要な分だけサブフォルダ(フォルダ名は任意)を作成し、そのサブフォルダ内に設定した入力フォルダや出力フォルダなど全てのフォルダを作成します。

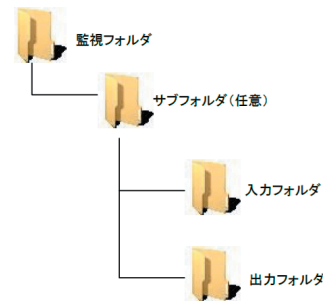
▼標準モード

監視フォルダ(入力フォルダ)と出力フォルダは別々に設定する。



▼IN/OUTモード

監視フォルダを設定し、その直下に任意のサブフォルダを作成して、その中に入力フォルダや出力フォルダなどすべてのフォルダを設定します。サブフォルダを増やせば複数の入力/出力フォルダを設定出来ます。標準モードでもサブフォルダは検索できますが、標準モードとの大きな違いはサブフォルダ毎に独立して入力/出力フォルダや成功時/失敗時の移動先フォルダ、トリ ガーファイル作成フォルダも別々に作成出来る事です。



IN/OUTモードの利点は2点あります。1つは1つのタスク設定で複数の入力フォルダを監視出来る事です。標準モードの場合、複数の入力ファイルを監視したい場合、同じタスク設定が監視したいフォルダ分だけ必要となります。必然的に監視動作の負荷も増大します。IN/OUTモードの場合は1つのタスク設定で済むため、監視動作の負荷が軽くなります。

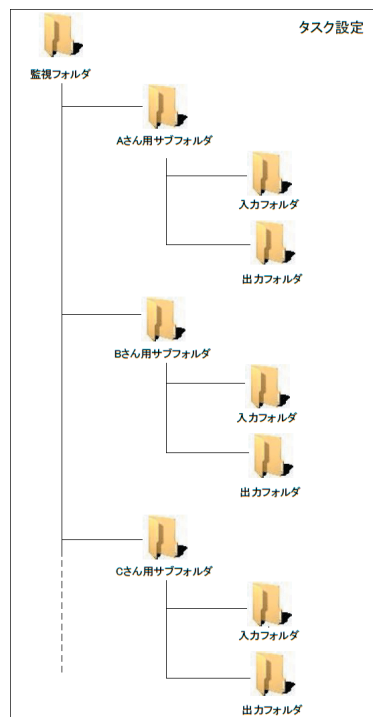
【例:設定内容は同じだが3人分の個別フォルダが必要な場合】

• 標準モードの場合



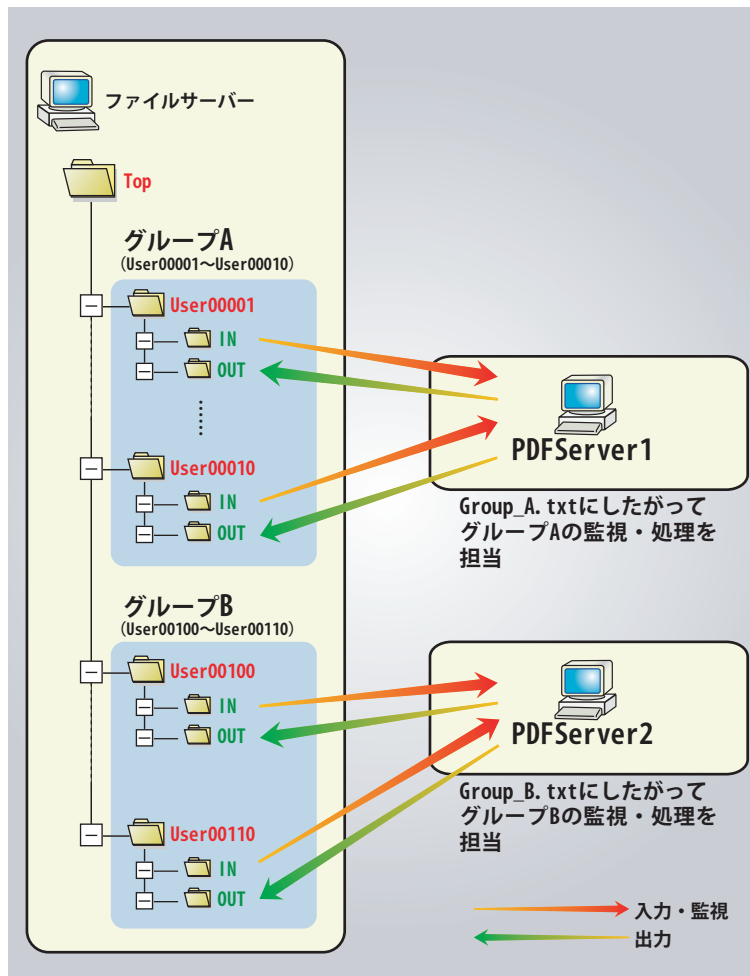
同じ設定でも個人別にタスク設定が必要になります。

• N/OUTモードの場合



1つのタスク設定で全ての人の個別フォルダを別々に変換出来ます。

もう1つは複数のPDF Serverで処理しやすい点です。任意のサブフォルダを記述した「リストファイル」を作成し、それぞれのPDF Serverで設定する事により、フォルダ単位で処理を分散できるため容易に負荷分散出来ます。フォルダの振り分けを変更したい時はPDF Serverを停止させてリストファイルを変更する事で行えます。詳細はユーザーズマニュアルの「IN/OUTモードでの複数のPDFServerによる運用」の項を参照して下さい。



```
User00001
User00002
User00003
User00004
User00005
User00006
User00007
User00008
User00009
User00010
```

Group_A.txt

```
User00101
User00102
User00103
User00104
User00105
User00106
User00107
User00108
User00109
User00110
```

Group_B.txt

リストファイルの例

※IN/OUTモードの注意

[タスク基本情報] → [監視時間設定] → [ファイル検索]の設定で、大量にファイルを変換する予定がある場合は検索ファイル数を多めに設定しておいて下さい。少ない場合、状況によっては後半のフォルダまで検索が終了せず、なかなか変換が終了しない場合もあります。

6.2. PDF編集の簡略化

PDF Serverでは各ファイルをPDFに変換した後、最後に変換設定の[PDF設定]により、PDFの設定を行います。

しかし、オフィス /アプリケーション変換がメインで、特にPDFの編集を行わない場合や、簡単なPDF編集だけならPDF編集を行わない事が可能です。これにより変換速度が少しだけ向上します。以下に設定概要を説明します。

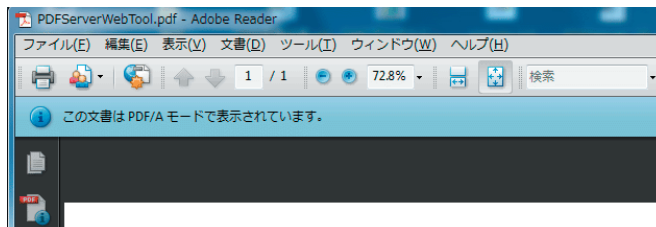
1. [変換設定] → [入力設定] → [オフィス設定] → [PDF Driver設定]で、「出力PDFファイルに出力設定のPDF設定を適用しない」にチェックを入れます。この項目にチェックが入っていると、オフィス/アプリケーション変換ではPDF DriverによるPDF変換のみ行われ、それ以外のファイル(イメージなど)は単純にPDFに変換します。この時、OCRや結合などは動作しないので注意して下さい。
2. 「MS-Office/アプリケーション変換で使用する設定」でPDF Driverの印刷設定を選択します。新たに作成したい場合や既存の設定を変更する場合は「設定」ボタンをクリックしてPDF Driverの設定画面を呼び出します。PDF Driverの設定のうち、「作成後のPDFを表示」や「保存」設定はPDF Serverでは無視されます。PDF Driverで主に設定可能な項目は以下の通りです。詳細はPDF Driverの設定マニュアルを参照して下さい。
 - ・PDFバージョンの指定
 - ・Web表示用に最適化
 - ・圧縮方法設定
 - ・フォントの埋め込み設定
 - ・セキュリティ設定
 - ・テキスト・イメージウォーターマーク設定
 - ・PDFの開き方
 - ・PDF情報の設定

※注意

「出力PDFファイルに出力設定のPDF設定を適用しない」にチェックが入っていると、Excel設定の「対象シート」を「全シート」、「出力方法」で「シートを1つのブックにまとめる」を選択した場合、シートの結合が行われませんので注意して下さい。

6.3. PDF/A、PDF/X変換

PDF/Aとは、PDF 1.4仕様に基づく、電子文書の長期保存用の形式です。また、PDF/Xとは、ISO15930で定義された、円滑な印刷工程を実現することを目的とした標準 PDFのサブセットです。PDF Serverでは PDF Driverの機能を利用して、オフィス /アプリケーション変換のみ、PDF/A、PDF/X変換に対応しています。



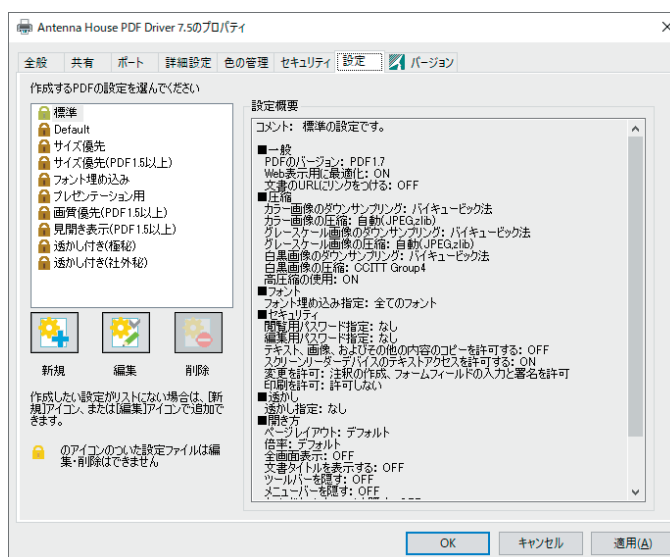
【「PDF/A」で変換されたPDFを開いた時の状態例】

MEMO :

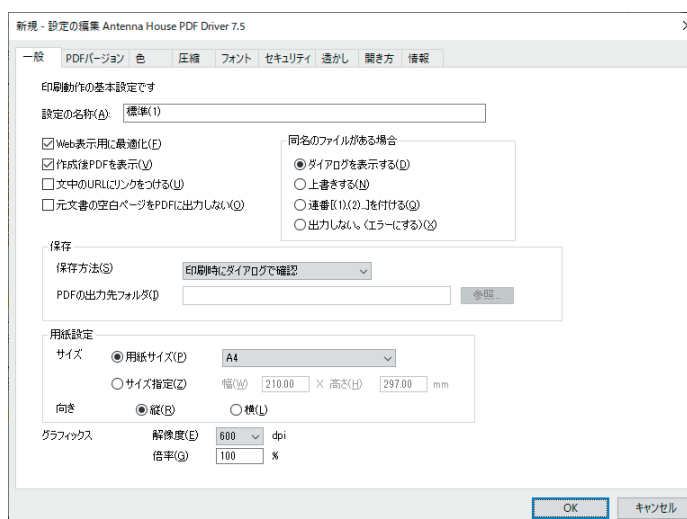
PDF Driver の設定の詳細については、PDF Driver のマニュアルを参照して下さい。

PDF Driver のマニュアルは、「スタート」メニュー → 「すべてのプログラム」 → 「Antenna House PDF Driver 7.5」 → 「利用ガイド」からアクセスできます。

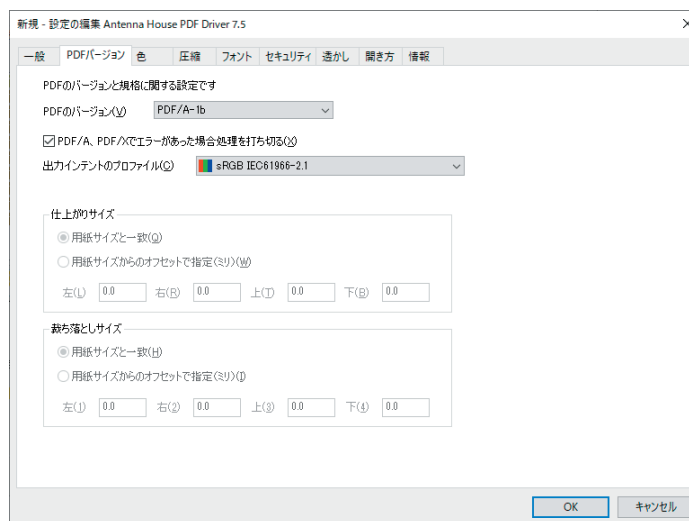
- 「6.2. PDF編集の簡略化」を参照して、「出力PDFファイルに出力設定のPDF設定を適用しない」の設定を行います。
- PDF Driverの設定画面を表示して「新規」ボタンをクリックします。



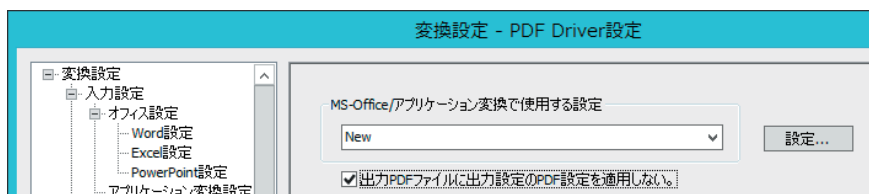
- 「一般」タブ画面が表示されます。この時、「設定の名称」フィールドには、選択していた設定名に括弧付きの数字を付した名称が設定されています(図の場合には「標準(1)」)。印刷設定を保存する際には、この画面で編集します。一度保存した設定の名前は、変更できませんのでご注意ください。



- 「PDFバージョン」タブ画面を表示した後、「PDFのバージョン」をPDF/Aの場合には「PDF/A-1b」、または「PDF/A-2b」を選択、PDF/Xの場合には、「PDF/X-1b:2005」などを選択した後、出力インテントのプロファイル、仕上がり／裁ち落としサイズなどを設定し、「OK」ボタンをクリックして「一般」タブ画面の「設定の名称」フィールドに設定されている名称でPDF Driverの印刷設定を保存します。



- [変換設定] → [入力設定] → [オフィス設定] → [PDF Driver設定]の「MS-Office/アプリケーション変換で使用する設定」を手順4で保存した設定名(図の場合には、「New」)に変更して「OK」ボタンをクリックします。

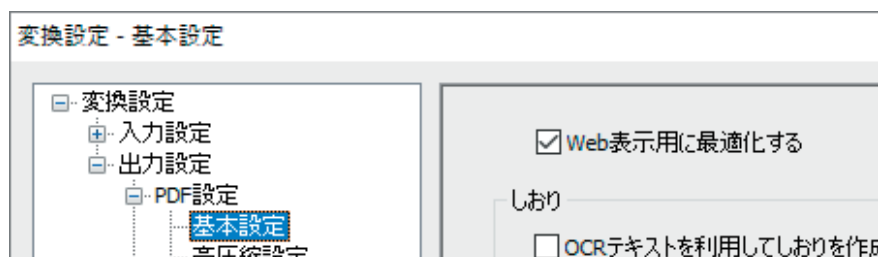


※「出力 PDF ファイルの設定をPDF Driverのみで行う」のチェックを忘れた場合はPDF/Aで出力されませんので注意して下さい。

6.4. Web表示に最適化

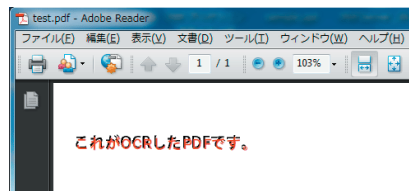
PDFは通常、最初から最後まで読み込まないとビューワー等で表示が出来ませんでした。ファイルサイズが小さい場合には問題となりませんが、大きくなると、読み込みに時間がかかり表示まで待たされる事があります。ローカルで実行するだけなら問題ありませんが、Webから表示を行った場合、通信速度によってはかなり待つ事になってしまいます。これを読み込んだデータから順次表示できるようにするのが「Web表示に最適化(リニアライズ)」と呼ばれる機能です。PDFがリニアライズされているかどうかは、Adobe Readerなど、PDFビューアを使ってファイルのプロパティ情報画面で確認することができます。Web表示に最適化されているからと言って、ファイルサイズが小さくなる訳ではありません(通常、ファイルサイズはほとんど変わりません)ので注意して下さい。読み込んだ順に表示出来るようにデータを再構成しているだけです。

出力するPDFをWeb表示に最適化するには、[変換設定] → [出力設定] → [PDF設定] → [基本設定]にて行います。下図のように「Web表示用に最適化する」にチェックを入れるだけです。



6.5. OCR

OCR(Optical Character Reader)とは画像内のデータを読み取り、文字の形状に基づいて文字を識別して実際の文字データに変換する事です。PDF ServerではOCRした文字をテキストファイルとして出力します。また、PDFの場合は画像の上に文字情報を重ねてセットします。



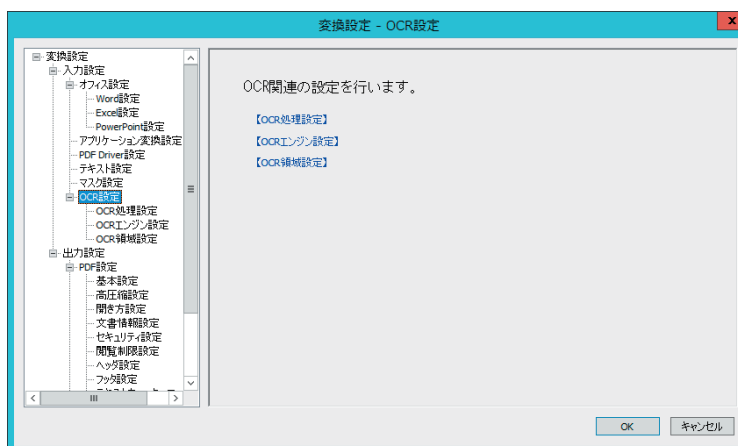
OCRテキスト埋め込みイメージ(本来表示されないテキストを赤色で表示)

PDF Serverでは以下のファイルがOCR設定の対象となっています。

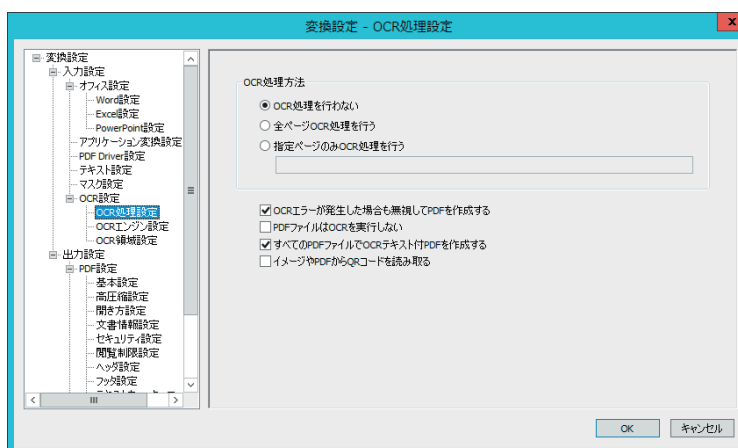
- ・ イメージファイル(ビットマップ /JPEG/TIFF/PNG/JPEG2000)
- ・ 画像が1枚のみのPDFファイル(※)

※ 画像が1枚のみのPDFとは、スキャナで読み込んで作成されたPDFの事です。ただし、高圧縮PDFファイルは対象外となっていますので注意して下さい。ただし、条件付きですべてのPDFでOCRを実行する事が可能です。詳細は次ページの「すべてのPDFでOCRテキスト付きPDFを作成する」を参照して下さい。

OCR設定は、[変換設定] → [入力設定] → [OCR設定]以下で行います。



OCRを実行するかどうかは [変換設定] → [入力設定] → [OCR設定] → [OCR 処理設定]にて行います。



「OCR」処理の項目で「全ページ OCR処理を行う」もしくは「指定ページのみ OCR処理を行う」を選択します。

▼OCR エラーの無視

「OCR エラーが発生した場合も無視してPDFを作成する」をチェックした場合、PDF ServerはOCRでエラーが発生した場合でも、これを無視してPDFを作成するようになります。

▼すべてのPDFファイルでOCRテキスト付きPDFを作成する

「すべてのPDFファイルでOCRテキスト付きPDFを作成する」にチェックをいれるとすべてのPDFファイルを対象にOCR処理を行うようになります。これはPDF ServerでOCR対象外も含めたPDFファイルに対して有効になります。この項目がチェックしてある場合、PDF Serverは入力ファイルがPDFだった場合、ページ単位で一度ラスタイメージに変換してからOCRを実行してそれをPDFにし、結合します。

このオプションを有効にすることで、どんな PDFでも OCR処理することができますが、デメリットとして、一度ラスタイメージに変換するため、処理に時間がかかる事と、高圧縮 PDFの場合は、高圧縮ではなくなってしまいます。また、ファイルサイズもかなり大きくなる事があります。

6.6. QRコード

QRコードとは、1994年に株式会社デンソーの開発部門が開発したマトリックス型二次元コードです。QRとは Quick Responseに由来し、高速読み取りができるように開発されたものです。元々は物流タグとしての利用が想定されていましたが、現在では携帯電話での読取など広く一般に普及しています。

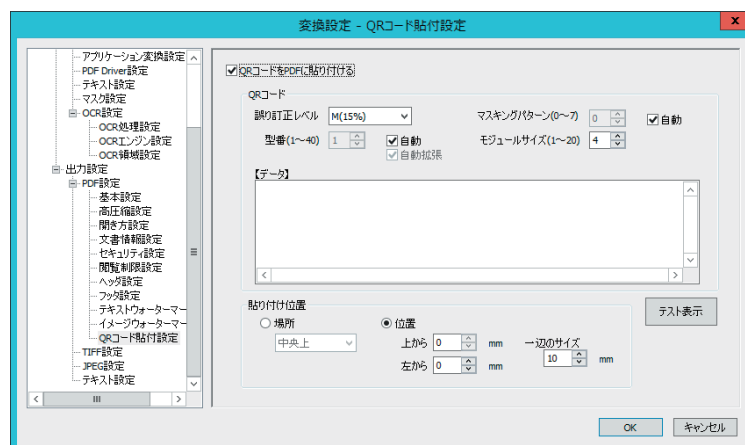


QRコードの例

PDF Serverでは QRコードを作成して PDFに貼り付ける事や、QRコードを利用した自動振り分けが可能となっています。

6.6.1. QRコードの貼り付け

PDF Serverでは出力する PDFファイルに任意の QRコードを貼り付けて出力する事が出来ます。設定は [変換設定] → [出力設定] → [PDF設定] → [QRコード貼付設定]で行います。



データに関してはフリーフォーマットになります。ただし、現状ではデータの差し込みが出来ませんので変換設定で固定されたデータのみとなります。

6.6.2. QRコード読取

PDF Serverは画像やPDFファイルを読み取ったときにQRコードが確認できて、且つその内容がPDF Serverフォーマットだった場合は、その内容にしたがって処理を行います。PDF Serverフォーマットでない場合や、PDF Serverフォーマットであった場合でも内容に誤りがあった場合などは、タスク/変換設定が使用されます。なお、マルチTIFFやPDFで複数ページを持つ場合には先頭ページのみを読み取ります。

▼QRコードの仕様

PDF Serverで読み取り、実行出来る項目は以下の通りです。

- ・出力先フォルダ
- ・出力ファイル名(拡張子は含まない)
- ・PDFの文書情報(タイトル/主題/作成者/キーワード/作成ソフトウェア)

QRコードの仕様は以下のようになっています。

ヘッダ;データ;データ;データ;データ

ヘッダ： ヘッダ文字列「PSV」を記述します。(半角固定値)
これがない場合、PDF Serve用ではないものとみなし、タスク/変換設定を優先して処理します。

セパレータ： セミコロン (;)をヘッダやデータの区切り文字とします。

データ： 「識別子=値」の形式で記述します。内容については、下表を参照して下さい。

識別子(半角)	設定内容
FNAME	出力ファイル名を設定します。拡張子はいれません。禁止文字が入った場合(“/” など)はエラーとなり、タスク設定されているものを利用します。
OUTDIR	出力(保存)フォルダを設定します。フォルダが存在しない場合はエラーとなり、タスク設定されているフォルダに出力(保存)します。
TITLE	PDFの文書情報のタイトルをこの値で設定します。
SUBTITLE	PDFの文書情報のサブタイトルをこの値で設定します。
AUTHOR	PDFの文書情報の作成者をこの値で設定します。
KEYWORD	PDFの文書情報のキーワードをこの値で設定します。
PRODUCER	PDFの文書情報の作成をこの値で設定します。

【例】

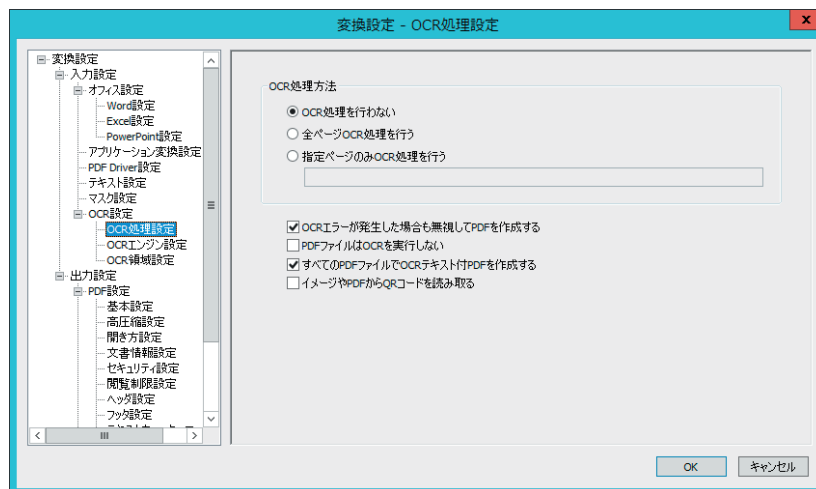
```
PSV;OUTDIR=D:¥pdfserver¥out;FNAME=output_pdf;TITLE=Title;
SUBTITLE=SubTitle;AUTHOR=Creator Name;KEYWORD=keyword;PRO
DUCER=Software
```

※注意

- ・ 識別子に対応するデータすべてが必要なわけではありません。1つ以上のデータがあれば構いません。
- ・ IN/OUTモードでは運用出来ません。また、結合・分割もうまく動作しない可能性があります。

▼設定

設定は [変換設定] → [入力設定] → [OCR設定] → [OCR 処理設定]で行います。「イメージや PDFから QRコードを読み取る」にチェックを入れれば設定完了です。



QRコードが確認できなかった場合は、通常通り、タスク / 変換設定にしたがって処理します。

6.7. 閲覧制限期限

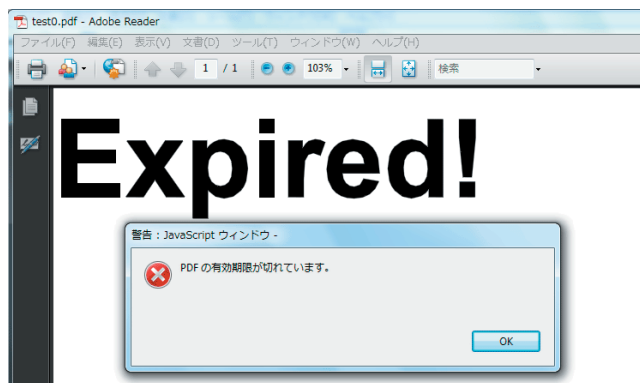
PDF Serverでは出力 PDFファイルに有効期限、または閲覧可能なファイルの保存場所を設定する事が出来ます。これは JavaScriptを PDFファイルに埋め込む事で実現しています。設定は [変換設定] → [出力設定] → [PDF設定] → [閲覧制限設定]で行います。



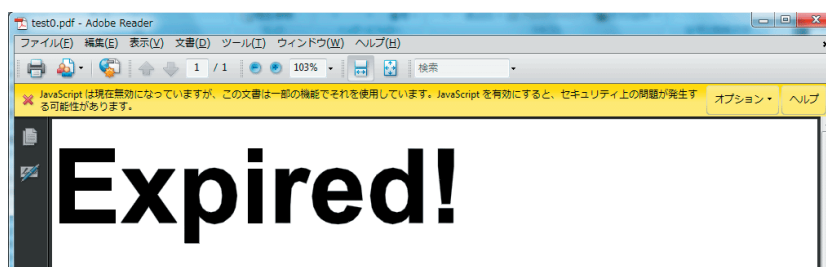
有効期限の場合、「期間設定」もしくは「経過日設定」のいずれかで設定します。「期間設定」では「開始日」または「終了日」、もしくはその両方を設定し、その該当する期間だけ PDFの閲覧を許可します。「経過日設定」は PDFに変換した日を起点にして設定した日数後に閲覧開始、または閲覧終了するかを設定します。閲覧開始は午前 0 時、閲覧終了は午後 23 時 59 分がリミットです。

閲覧場所を制限する場合、閲覧を許可するファイルの保存場所(フォルダ、もしくは URL)を設定します。(フォルダを設定する場合には、フィールド右の「参照」ボタンをクリックして表示される「フォルダの参照」ダイアログを利用できます。)

有効期限切れや閲覧を許可された場所以外に保存されている PDFを表示すると以下のように「警告メッセージ」フィールドに入力した文字列が表示されます。



Adobe Reader など、ビューワー側で「JavaScript」が無効だった場合、以下のようなメッセージが表示されます。



これは閲覧の有効期限がまだ切れていないが、有効期限が設定してある PDFファイルの場合も同様です (JavaScriptを有効にすると閲覧できます)

※ 環境によっては、閲覧条件を満足する状態で有効期限が設定されているPDFファイルを開いた時に一瞬だけ警告メッセージ(上記の場合は「Expired!」)が見える場合がありますが、これは仕様です。

6.8. 結合

PDF Serverでは、入力ファイルに対して「結合」が出来ますが、この結合処理はPDF Serverの中では特殊な処理となっています。結合は対象となるファイルを全てPDFに変換したうえで結合し、変換設定の[PDF設定]に従いPDFの編集を行います。通常の場合と変換フローが変わるため、状況によって出来ない場合と、思い通りにいかないケースもあります。結合処理を行う場合はなるべく「結合」のみに絞ってタスクを設定する事をお勧めします。ファイル結合に関する主な制限は以下の通りです。

- ▼ 分割設定と同時に実行することができません。
- ▼ IN/OUTモードでは期待通り結合できません(※)
- ▼ サブフォルダを検索している場合は期待通り結合できません(※)
- ▼ QRコード読取設定が有効な場合は結合できません。
- ▼ オフィス/アプリケーション変換で、PDF Driverに「セキュリティ」設定を行った場合は結合に失敗します。
- ▼ 入力がPDFファイルの場合、セキュリティが設定されていると結合に失敗します。

※ 結合はファイル検索されたファイル(キューイングされたファイル)を対象に実行します。結合後の設定はソートされた最初のファイルの設定が優先的に利用されます(PDFの文書設定など)そのため、サブフォルダやIN/OUTモードの場合、出力フォルダは最初のファイルの出力フォルダ設定が適用されてしまうため、仕様上、期待通りにならない事があります。

6.9. トリガーファイル

トリガーファイルとは、変換終了後に出力される変換結果を格納したファイルで、出力されるファイル単位で順次作成されます。他システムで出力ファイルを監視する場合、出力ファイルは出力途中からフォルダ内に存在するため、出力ファイルの有無だけを監視してもいつ処理が終了したのかを判断できません(途中だとサイズがゼロだったり、ロックされていたりするため処理ができません) トリガーファイルはファイルの出力が完了した時点で出力され、内容は変換が完了した日時と結果(成功/失敗)が記録されています。トリガーファイルを監視する事によって早い段階で次の処理へ移行可能です。

▼ 出力について

トリガーファイルは以下のように出力されます。

- 出力ファイル名と同じファイル名で作成されます。(拡張子は任意で設定します。)
- 結合を行った場合は最終的に結合して出力されたファイル名で作成されます。
- 分割を行った場合は、分割したファイル数だけ出力されます。

▼ ファイルの内容

トリガーファイルの中身はテキストファイルとなっており、以下のようなフォーマットになっています。

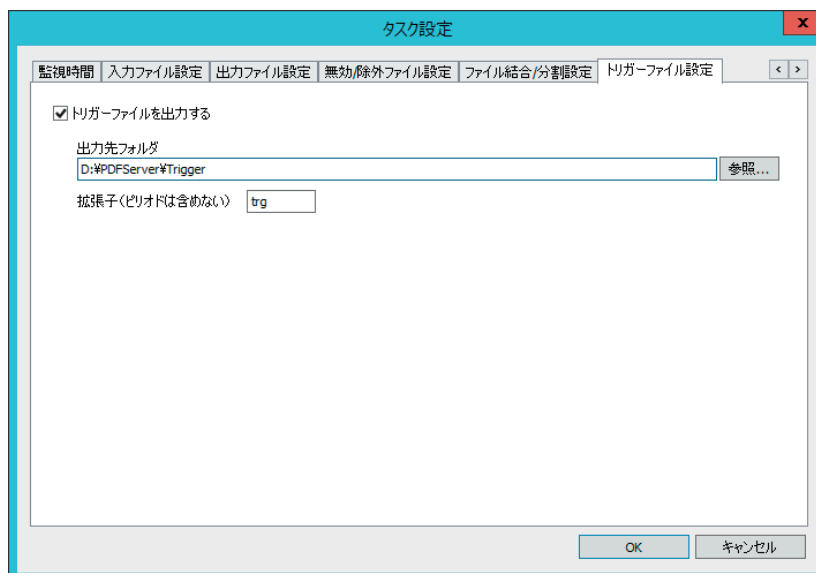
```
[information]
creation=YYYY/MM/DD hh:mm:ss      ..... ①
status=success(failure)           ..... ②
```

① 変換完了日時

② 完了ステータス(success:成功 / failure:失敗)

▼ 設定

設定はタスク設定の[トリガーファイル設定]タブ画面で行い、出力先フォルダと拡張子を設定します。



IN/OUTモードの時は入力フォルダや出力フォルダと同じようにサブフォルダに格納するようになります。

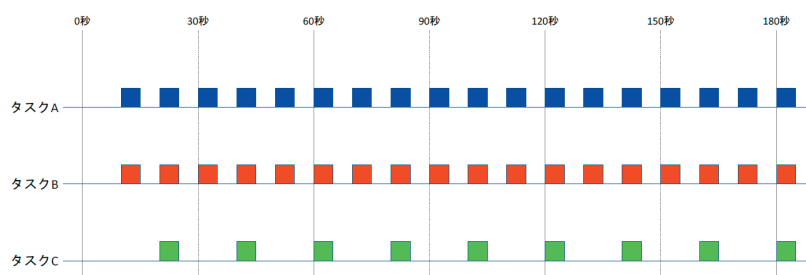
6.10. タスクの連動

PDF Serverではタスク同士の設定は基本的に独立しています。ただし、標準モードにおいて出力フォルダや失敗時移動先フォルダなどを別タスクの監視フォルダに設定すると、擬似的に複数のタスクを連動させる事が出来ます。ただし、あくまでもタスク間の設定は連動しないので、動作させるタスク数に応じて、設定に工夫が必要です。

▼留意する事

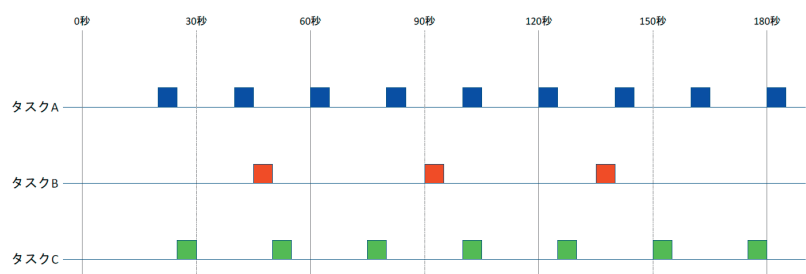
「5.1. タスクについて」にあるように、複数タスクが動作している場合、変換動作は基本的に“早い者勝ち”です。そのため、すべてのタスクで同じかもしくはほとんど差が無い監視時間に設定すると、状況によっては後のタスクの変換処理が始まりません。そのため、タスクの連動も考えた監視時間の設定が必要となります。例えば、タスクA、B、Cがあったとして、タスクAの出力フォルダがタスクCの入力フォルダだったとします。この場合、以下のような監視時間ですと、図に示す通り、ほぼタスクAとタスクBで常に処理がおこなわれている状態になります。PDF Serverは早い者勝ち、なおかつタスク設定順に起動がかかるので、状況によってはタスクCになかなか変換処理が回ってこない可能性があります。

タスクA → 10秒 タスクB → 10秒 タスクC → 20秒



考え方としてはそれぞれが同じタイミングで監視動作が始まらないようにする事がベストです。また、監視時間の間隔もタスクが増えれば増えるほどあける必要があります。タスク同士がなるべく同じタイミングで監視動作を行わないように以下のように工夫します。これならタスクAが終わった頃にタスクCが起動される事が多くなるため、タスクBも気にしつつ、連携しやすいと言えます。

タスクA → 20秒 タスクB → 45秒 タスクC → 25秒



監視時間については、運用後も負荷によって変更する事が最終的に適切な動作につながります。一番いいのは連動タスクのみ(上記例ではタスクAとタスクC)で設定を行う事です。多数設定したタスクで動作を均衡化するのは非常に難しい事だけは常に留意する必要があります。

7. PDF Server の制限事項

PDF Server はいろいろなソフトウェアを組み合わせて利用しています。そのため、いくつかの制限事項が存在します。ここではそれらについて説明します。なお、最新の情報はアンテナハウスの Web サイト上に公開されます。何か疑問などありましたら、まずはそちらの方も合わせて御確認をお願いいたします。

【よくいただくご質問】

<https://www.antenna.co.jp/support/faq-sys/psv/pdfserver35.html>

7.1. PDF Server全般の制限事項

- ▼ PDFServer が扱える PDF ファイルのバージョンは PDF 1.x(~ 1.7)となっており、PDF 2.0 には対応しておりません。
- ▼ PDFServer が取り扱えるファイルのパス長はフルパスで最大 210 文字までです。これは監視フォルダ（入力ファイル）内のファイルのパスだけではなく、変換ファイルの出力先、成功時／失敗時の入力ファイルの移動先、トリガーファイルの出力先のパス※などの長さにも影響されますので、それぞれについて制限を超えないよう、パスの長さを調整してください。
※ In/Out モードの場合、入力フォルダなどは、監視フォルダのサブフォルダ配下のパスとなります。
また、PDFServer の作業フォルダを変更される場合、これらの長さも制限に影響を与えます。デフォルトでは、作業フォルダのパスは“C:¥ProgramData¥pdfserver3¥work”となり、これより長いパスを作業フォルダに指定される場合は、その分ファイル名に使用できる文字数が減少することになりますのでご注意ください。
- ▼ 監視 / 出力フォルダとしてネットワークフォルダを利用することができますが、アクセス権限の設定は正しく行って下さい。設定が正しくないとアクセスが拒否され、ファイルの入出力が行えません（エラーが発生してしまいます）。また、ファイアウォールの設定についても必要な場合は設定して下さい。なお、アクティブディレクトリには対応していません。
- ▼ 変換処理中にコントロールセンターの「停止」ボタンなどを使って PDF Server サービス（AH PDF Server V3 Service）を停止しないで下さい（監視処理中であれば構いません）。PDF Server は変換処理に区切りがつくまで停止処理を行わずに変換処理の終了まで待っていますが、タイミングによっては途中で強制終了する可能性があります。可能ならば動作中のタスクを全て終了してから停止させて下さい。
- ▼ コントロールセンターは常時表示しなくても PDF Server は変換処理を行いますので、必要のない時は閉じておいてください。
- ▼ タスク動作中に監視フォルダ内のファイルやサブフォルダの移動や削除など、監視フォルダについて追加以外の操作を絶対に行わないで下さい。動作保障をしかねます。
- ▼ TIFF や JPEG の PDF 変換を行う時にシステム稼働状態を監視する場合、停止判定時間はなるべく長めに設定して下さい。変換ファイルサイズとシステムのリソースの状態によっては、停止していない場合でも停止と判断されるケースがあります。特にファイルサイズが大きな場合は注意して下さい。長時間に渡る変換を行う場合には稼働監視設定をオフにすることをお勧めします。
- ▼ 他のサーバーソフトウェアやいろいろなアプリケーション、Web システムなどとの併用は、異常動作の原因となりますので避けて下さい。
- ▼ 入力ファイルが PDF の場合、パスワードなどのセキュリティが設定されているものは編集などを行う事が出来ないため、処理が失敗します（エラーとして処理されます）。また、PDF Server ではセキュリティの解除や再設定は出来ません。

PDF Serverが取り扱うことができるファイルのフルパスについての制限事項

PDFServer が取り扱えるファイルのパス長はフルパスで最大 210 文字までです。PDFServer の設定項目で、ファイル名／フォルダに関わる物について、ファイル名とフォルダパスの長さがフルパスで 210 文字までに収まるように調整してください。

フルパスに影響を与える設定

フルパスに影響を与える設定は以下の通りです。

PDF Server 設定:

作業フォルダのパス

初期状態では、作業フォルダは以下のパス（31 文字）に設定されています。

C:\ProgramData\pdfserver3\work

PDFServer は、作業フォルダ配下にサブフォルダを作成し、そこに入力ファイルと同じ名前の一時ファイルを作成しながら動作します。そのため作業フォルダのパス長に加え 10 文字が必要になります。つまり、初期状態では 41 文字となりますので、これを考慮に入れて調整してください。

タスク設定:

基本情報

- ・監視フォルダのパス

入力ファイル設定

- ・成功時のファイルの移動先フォルダパス+同名の別名時の数字付与 (括弧付き)
- ・失敗時のファイルの移動先フォルダパス+同名の別名時の数字付与 (括弧付き)

出力ファイル設定★

- ・出力先パス
- ・ファイル名の設定 (各要素間にはアンダースコア “_” が入ります)

フォルダ名と連番 (桁数)	FOLDER_9999
指定文字列と連番 (桁数)	XXXX_9999
指定文字列と日付と連番 (桁数)	FOLDER_YYYYMMDD_9999
指定文字列と元ファイル名	XXXX_FILE
- ・ファイル名の設定 (特殊)

OCR 結果 (指定文字数) と日付 (任意) と連番 (任意)	OCR (_YYYYMMDD) (_9999)
----------------------------------	-------------------------
- ・重複時の処理

数値をつけ別名にする	
上記各種出力ファイルと数値 (括弧付き)	OUTNAME (9)

無効 /除外ファイル設定

- ・無効時 /場外時の移動先フォルダパス+同名の別名時の数字付与 (括弧付き)

トリガーファイル設定

- ・出力先フォルダのパスと拡張子

※ IN/OUTモードについて

IN/OUTモードでは、上記「監視フォルダ」が親フォルダとなり、そのサブフォルダ(=ユーザーフォルダ) 配下に各パスが含まれる形となります。それぞれのフォルダは相対パスで指定することになりますので、これらの構成も考慮に入れてください。

[監視フォルダ]/[ユーザーフォルダ]/[入力フォルダ]

[監視フォルダ]/[ユーザーフォルダ]/[出力先フォルダ]

[監視フォルダ]/[ユーザーフォルダ]/[各種移動先フォルダ]

変換設定:

出力設定

JPEG 設定

ファイル名のフォルダを作成し、その中へファイル名に連番を付加して出力する。

[出力ファイル設定に基づいたファイル名のフォルダ]/999.jpg

テキスト設定

1 ページずつ別ファイルに出力する (ページ連番の桁数)

出力ファイル設定に基づいたファイル名 + 999

7.2. Microsoft Officeファイル変換時の制限事項

- ▼ PDFServer の Office 変換はログオンした状態での利用をサポートしています。必ずログオンしたアカウントで動作させている PDF コンバーターを経由した変換を行ってください。なお、PDFServer の監視サービスを含む Windows サービスや ASP、ASP.NET、DCOM などから直接利用した場合の動作保証は致しかねます。

補足事項: PDFServerの「Microsoft Officeファイル変換」でのPDF変換機能には弊社PDF Driver APIを使用しております。これはOfficeのオートメーションを利用して実現していますが、以下に示すようにマイクロソフト社は、「無人の非対話型クライアント アプリケーションまたはコンポーネント (ASP、ASP.NET、DCOM、および NT サービスを含む) からの Microsoft Office アプリケーションのオートメーションに関して、推奨もサポートも行っておりません。」

参考URL: Officeのサーバーサイドオートメーションについて

<https://support.microsoft.com/ja-jp/topic/office-%E3%81%AE%E3%82%B5%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%83%89-%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%A1%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6-48bcfe93-8a89-47f1-0bce-017433ad79e2>

- ▼ Office 変換で利用する Microsoft Office のライセンスについて
Office 変換をご利用になられる場合には、Microsoft Office のライセンスについてもご注意ください。「Office 変換を利用するすべてのクライアント」にライセンス認証済みの Office がインストールされている必要があります。「Office のライセンスの無いクライアント」から PDFServer の Office 変換を利用することはライセンス違反になります。Office のライセンスについて詳細は Microsoft 社にお問い合わせください。なお、Office のライセンス違反等の問題が発生いたしましても当社は一切関知いたしません。
- ▼ パスワードが設定されているオフィス文書ファイルは、正しく処理できません。トラブルを避けるためにもパスワードが設定された文書ファイルは投入しないで下さい。
- ▼ 原則としてマクロが設定されている等の理由により、開いた時にダイアログが表示されるような文書ファイルは投入しないようにして下さい。PDF Server は、表示されるダイアログに応答があるまで待機するため、その間、処理が停滞します。
※ マクロが設定されている Office ファイルについて、PDF Server がこれを開いた時の動作は、Office アプリケーションのセキュリティセンターの「マクロの設定」に従って行います。運用中に問題が生じた場合には、各 Office アプリケーションのセキュリティセンター、「マクロの設定」をご確認下さい。
- ▼ 動作タスクが多いとリソースの関係でオフィス変換が失敗する事があります。このような場合、メモリを増設するか、消費するメモリ量を減らすために同時に稼働するタスク数を減らして見て下さい。この障害を切り分けるには、一度全てのタスクを停止してひとつだけタスクを起動し、エラーになったファイルの変換を実行してみます。変換できる場合には、リソース不足が原因となっている可能性が高いです。

- ▼ Excel ファイル変換時にグラフオブジェクトがあるシートを「アクティブシート」以外の設定で出力すると変換に失敗する事があります。
- ▼ オフィスファイルを別々のタスクでオフィス変換機能とアプリケーション変換機能の両方で変換した場合、変換タイミングによってはどちらかの印刷設定の影響で、出力された PDF ファイルが意図しないものになる事があります。アプリケーション設定は、オフィス変換と併用するための機能ではないので、両方使用した事により出力された PDF ファイルに関しては保障できません。また、復旧されない場合は一度「PDF コンバーター」を終了して再起動させます。
- ▼ PowerPoint ファイルを変換した場合、変換途中で PDF ファイルが開き、変換エラーとなるケースがあります。この場合、PDF ドライバの印刷設定の「一般」タブ画面にある「作成後 PDF を表示」のチェックを外した設定を作成し、そのドライバ設定をタスク設定で適用すると変換途中で PDF ファイルが開かなくなります。
- ▼ PowerPoint ファイルの変換において、かなりの確率で失敗する場合は、そのファイルを PowerPoint を開き、「オプション」→「詳細設定」→「印刷」から「バックグラウンドで印刷する」のチェックを外して保存したものを変換します。

7.3. アプリケーション変換時の制限事項

- ▼ アプリケーション変換をご利用になられる場合には、変換に利用するアプリケーションのライセンス規約をご確認ください。サーバーサイドでの利用が禁止されていたり、サーバーで利用するためのライセンスが必要になる可能性があります。ライセンス違反等の問題が発生いたしましても当社は一切関知いたしません。ご不明な点については、当該アプリケーションの製造 / 販売元などにご確認いただき、お客様ご自身の責任において運用して頂きますようお願いいたします
- ▼ 変換したいドキュメントのアプリケーションの制限などは特にありませんが、PDF Server と動作環境が同じとは限らないため使用には注意して下さい。特にサーバー OS に対応していないアプリケーションについては注意が必要です。
- ▼ アプリケーション変換はシェルの印刷機能を利用した汎用的な PDF 変換となり、その挙動は文書ファイルに関連付けられているアプリケーションに依存することになります。そのため、すべての文書を PDF 変換ができることや安定的な稼働を保証するものではないことにご注意ください。変換したい文書について、評価版などで実際に変換可能か否か事前にご確認いただくことを推奨いたします。特に連続稼働などをご検討の場合には事前にその動作について十分に検証していただきますようお願いいたします。
- ▼ アプリケーションによっては「シェル印刷機能」がないもの（エクスプローラでドキュメントアイコンを右クリックして表示されるコンテキストメニューに「印刷」の項目がないもの）は変換出来ません。代表的なソフトウェアとして、DTP/CAD ソフトなどがあります。印刷機能がないソフトウェアは印刷実行時に対話型処理（例えば印刷範囲指定など）が必要なものです。
- ▼ アプリケーション変換では Microsoft Office の文書ファイルの拡張子も登録できます。PDF Server ではオフィス変換よりも先にアプリケーション変換を行うため、登録した場合は、アプリケーション変換の方が優先されます。アプリケーション変換を使えば Office 2013/2016/2019 以外の対応していないバージョンの Office を使って変換出来ませんが、印刷設定に関しては Office ソフトウェアのものが使用されますので Excel などは全シート印刷が出来ないなど、制限がありますので注意して下さい。
- ▼ アプリケーションの評価版でも印刷機能が使用できれば PDF Server で変換は可能です。ただし、中には確認のためのダイアログを表示してユーザーの応答が必要なソフトウェアもあります。その場合、そのダイアログに応答しないとタイムアウトでエラーになってしまうので注意して下さい。
- ▼ アプリケーション変換実行時は該当するアプリケーションが自動で起動して PDF に変換後、終了します。そのため、画面上にドキュメントが表示されるので注意してください。
- ▼ 表計算ソフトなど、ドキュメントに複数シートが含まれる場合、通常はアクティブ（一番手前に選択されているシート）なシートを対象に変換を行います。また、ページ範囲指定など変換に関する情報はアプリケーションやドキュメントに保存されている設定で行いますので、必要に応じてアプリケーション側で設定を行って下さい。

7.4. PDF Driver 設定の制限事項

- ▼ プリンタドライバ設定の「出力 PDF ファイルの設定を PDF Driver のみで行う」にチェックを入れていない場合（通常の場合）、PDF Driver の設定でセキュリティ設定を行わないで下さい。その後の PDF 編集が出来なくなって変換処理が失敗します。
- ▼ PDF Driver 設定のオプション「出力 PDF ファイルに出力設定の PDF 設定を適用しない。」にチェックマークを付けていない場合（通常の場合）、PDF Driver の印刷設定と変換設定の PDF 設定で同じ項目の設定を行った場合、文書情報など PDF Server の設定が優先されます。また、一部の設定(ウォーターマークなど)は、双方の設定が有効となりますので、このオプションを有効にする場合には注意が必要です。特にフォントの埋め込み等の設定を行わない場合、使用する印刷設定は「Default」が良いと思われます。

7.5. OCRの制限事項

- ▼ OCR 処理を行ったファイルで、PDF 設定の「高圧縮設定」を行うと失敗する事があります。
- ▼ マルチ TIFF ファイルで分割を行ったとき、OCR 処理の設定でページ数指定をしていた場合は、分割後のファイルが対象になるために 1 ページ目の指定がないと OCR 処理が行われません。

7.6. TIFFの制限事項

- ▼ 「LZW（ZLIB）圧縮」など、圧縮設定を無効にすると入力ファイルによっては、サイズの大きいTIFFファイルが出力されます。
- ▼ 入力画像の圧縮方式や色深度・解像度によっては変換に失敗する事があります。ユーザーズマニュアルの巻末に対応画像フォーマットについての一覧表があるので参考の上、確認して下さい。

7.7. ログの制限事項

- ▼ 処理のタイミングによってログの表示が前後する事があります。これは、製品の仕様です。変換処理を優先するため、ログ出力処理の優先順位は、他の処理より低くなっています。
- ▼ 初期状態では、ログファイルは、自動的に削除されません。そのまま利用すると出力するログファイルによってディスク容量が無駄に消費されることとなりますので、PDF Server 設定を用いて定期的に削除するように設定して下さい。（ログファイルは、インストールフォルダの「log」フォルダ内に保存されます。）

7.8. PDF Serverコマンドの制限事項

- ▼ 画像ファイルを変換した場合、エラーメッセージらしきものが出力される事があります。これは画像ライブラリが出力するもので、特に PDF Server が出力するものではありません。その場合でもステータスコードが「0」でファイルが出力されていれば問題はありません。
- ▼ 出力するフォルダに有効なアクセス権限がないと変換ファイルが出力されません（特に Web アプリケーション）。また、場合によっては実行時に権限が必要になる場合がありますので、権限偽装などの実装が必要になる場合もあります。

7.9. その他の制限事項

- ▼ フルパスで 260 文字以上となるファイルを監視フォルダに投入した場合、これらのファイルは監視プログラムで移動／削除できないため監視フォルダに残ったままとなり、コントロールセンターの未処理数にカウントされ続けることとなりますので、注意してください。
- ▼ PDF Server は VMWare などの仮想マシン上でも動作します。しかし、その場合、実機で動作させるよりも動作速度が遅いため、設定するスペックなどには、十分に気をつけて下さい。
- ▼ PDF Server の変換処理中に Excel/Word/PowerPoint/Visio やアプリケーション変換に登録している拡張子に関連付けられているアプリケーションを起動して作業しないで下さい。これらのアプリケーションを使った変換が行われる場合、変換終了時に対象となるアプリケーションを終了させます。また、変換動作に影響を及ぼす可能性もありますので注意して下さい。
- ▼ リモートデスクトップを利用する場合は注意が必要です。特にオフィス / アプリケーション変換を利用する場合には、必ず「2.2.4. PDF コンバーターについて」を参照して必要な設定を行って下さい。また、複数の端末からリモートデスクトップを使ってログオンし、コントロールセンターをそれぞれの端末で実行した場合、最初に起動したもの以外は、強制的に終了させられます。リモートデスクトップを使って PDF Server の遠隔操作を行う場合は、必ず 1 台の端末のみで操作してください。

8. PDF Server コマンド [プロ フェッショナル 版/コマンド版]

ここでは、PDF Server コマンドの概要とその活用方法を説明します。

8.1 PDF Serverコマンドの注意事項

PDF Serverコマンドは、評価版・正規版を問わず、PDF Serverのプロフェッショナル版、またはコマンド版のいずれかがインストールされている環境で使用できます。

※ インストール時にパス情報が、環境変数「Path」の末尾に自動的に追加されるため、どこのフォルダがカレントフォルダであっても動作します。「コマンドプロンプト」を起動して「pdfsvcmd300」と入力して実行（Enter キーを押下する）とコマンドヘルプ（下図）が表示されます。



```
管理者: コマンド プロンプト
-S setting-name : Convert setting-name used in the conversion.
-O          : In the case of OCR the image file to run.
-D printer-setting : Driver set to use the setting-name.
-Out type@path : PDF file output folder after conversion.
               pdf@ / PDF file.
               tiff@ / TIFF file.
               jpeg@ / JPEG File.
               txt@ / Text file.

-A          : Application to convert the input file.
-Ggdi      : Use GDI+ to convert the image.
-Gscale scale : [1-100]%. Scale of the output image.
-Gdpi resolution : [50-1200]dpi. The resolution of the output image.
-Gcolor color-mode : [0-3]. Color mode of the output image
                 0/ Keep Original
                 1/ Monochrome
                 2/ GrayScale
                 3/ 256 colors
-Gcomp compress-type : [0-6]. Compression of TIFF output
                    0/ No Compress
                    1/ LZW(ZLIB)
                    2/ JPEG
                    3/ DEFLATE
                    4/ RunLength
                    5/ CCITT Group 4
```

8.2. PDF Serverコマンドで行うことができる事

PDF Serverコマンドはユーザーインタフェースを持たないアプリケーション型のPDF Serverです。通常のPDF Serverと大きく異なるのは「常時監視型」ではなく、任意に変換を実行出来る事です。そのため、他ソフトウェアからPDF Serverを呼び出して変換を実行出来る事が一番の特長となっています。ただし、PDF Serverコマンドを実行するには「PDF Server サービス(AH PDF Server V3 Service)」が「停止」していないと実行できませんので注意が必要です(同時実行は出来ません)。

PDF Serverコマンドは引数(パラメータ)で動作を制御します。また、その処理内容によっては複数のPDFServerコマンドを同時に実行(マルチプロセス)できます。そのため、PDF Serverコマンドを利用するにはある程度、引数の組み合わせでどのように動作するか、マルチプロセスに対応しているのかを知る必要があります。

マルチプロセスに対応していない処理は以下の通りです：

処理の内容	オプション
変換設定を指定した変換処理	-s 変換設定ファイル名
OCRを実行してからPDFに変換する	-O
PDFファイルをページ単位に独立したファイルに分割する	-Dv
アプリケーション変換を使ってPDFに変換する	-A
出力ファイル形式がテキスト	-Out TXT@C:¥TMP

8.2.1. 入力ファイルのみを指定する

```
> Pdfsvcmd300 test.xls
```

引数に入力ファイルのみを指定すると、PDF Serverのデフォルト状態(単純にPDFに変換するだけ)で入力ファイルをPDFへ変換します。入力ファイルはイメージ、テキスト、Microsoft Officeファイルなどです。変換されたPDFファイルは入力ファイルと同じフォルダに出力されます。

8.2.2. OCRを実行してからPDFに変換する(マルチプロセス非対応)

```
> Pdfsvcmd test.bmp -O
```

引数の入力ファイルの後に[-O] オプションを付加すると、OCRを実行してPDFに変換します。ただし、イメージ(画像)ファイルのみで、それ以外のファイル(例えばテキストファイルなど)を指定した場合にはオプションは無視(OCRを実行できないため)されます。変換されたPDFファイルは入力ファイルと同じフォルダに出力されます。

8.2.3. PDFドライバの設定を指定してPDFに変換する

```
> Pdfsvcmd300 test.doc -D 透かし付き(社外秘)
```

引数の入力ファイルの後に[-D] オプションを付加してその後にドライバの印刷設定名(上の例では「透かし付き(社外秘)」)を入力すると、PDF変換時にその設定を利用します。この場合、有効になるのはMicrosoft Officeファイルのみです(PDFドライバを利用して変換するもののみ)。ドライバの印刷設定名が誤っている場合、「Default」設定を用いて変換します。変換されたPDFファイルは入力ファイルと同じフォルダに出力されます。

8.2.4. アプリケーション変換を行って PDF に変換する(マルチプロセス非対応)

```
> Pdfsvcmd300 test.jtd -A ①
> Pdfsvcmd300 test.jtd -A D 透かし付き(社外秘) ②
```

引数の入力ファイルの後に[-A] オプションを付加するとアプリケーション変換を行います(上記例は一太郎ファイルです)。

アプリケーション変換を行う時には、変換対象となる文書ファイルの拡張子に関連付けたアプリケーションがインストールされている必要があります(インストールされていない場合の動作保証されていません)。また、変換時に PDF ドライバの設定を利用したい場合は上記例の②のように[-D] オプションを併用することができます。[-D]オプションが設定されていない場合には「Default」設定で変換を行います。アプリケーション変換を用いて「Microsoft Office ファイル」を変換することもできますが、通常の変換と異なる結果になる場合もあるので注意して下さい。変換された PDF ファイルは入力ファイルと同じフォルダに出力されます。

なお、アプリケーション変換はマルチプロセスに対応しておりません。アプリケーション変換が実行されている最中に他の PDFServer コマンドを実行することが出来ません(エラーになります)。

8.2.5. 変換設定を利用して変換を行う(マルチプロセス非対応)

```
> Pdfsvcmd300 test.doc -S 変換設定 1
```

引数の入力ファイルの後に[-S] オプションを付加してその後に変換設定名を入力すると、変換時にそのタスク設定を利用します。タスク設定は別途「設定編集ツール」を用いて作成します。この場合は PDF だけではなく、TIFF や JPEG、OCR テキストファイルの出力も行う事が出来ます。タスク設定の全てが有効になる訳ではありませんが(詳細についてはユーザーズマニュアルを参照して下さい)、ほとんどの PDF Server の機能が利用できます。変換された PDF ファイルは入力ファイルと同じフォルダに出力されます。なお、変換設定を利用した変換はマルチプロセスに対応しておりません。変換設定を利用した変換処理が実行されている最中に他の PDFServer コマンドを実行することが出来ません(エラーになります)。

8.2.6. 出力ファイルを任意のフォルダに出力する

```
> Pdfsvcmd300 test.ppt -Out c:¥pdfserver¥out
```

引数の入力ファイルの後に [-Out] オプションを付加してその後に出力したいフォルダパスを指定します。これは他の [-O] [-D] [-A] [-T] 各オプションとも併用出来ます(オプションの指定順序は問いません)。変換後の出力ファイルは [-Out] オプションの後に指定したフォルダパスに出力されます。[-T] オプションの場合、タスク設定よりも [-Out] オプションの方が優先となりますので注意して下さい。PDF 以外の TIFF や JPEG、テキストファイルもすべて [-Out] オプションで指定したフォルダパスに出力されます。なお、出力ファイル形式がテキストの場合には、マルチプロセスに対応しておりません。これらの形式のファイルが出力される処理が実行されている最中に他の PDFServer コマンドを実行することが出来ません(エラーになります)。

8.2.7. PDF ファイルを結合する

```
> Pdfsvcmd300 -J test1.pdf test2.pdf test3.pdf test4.pdf
```

PDF Serverコマンドでは「結合」だけが変換と同時に行う事が出来ません。結合を行うにはコマンドの後に [-J] オプションを入力し、その後に結合したい PDF ファイル(結合が行えるのは PDF ファイルのみです)を列挙して入力します。結合された PDF ファイルは最初に指定された PDF ファイルと同じフォルダに出力されます。また [-Out] オプションを指定した場合は入力された任意のフォルダパスに出力されます。出力ファイル名は最初に指定したファイル名の頭に「cmb_」を付加したものの(上記例の場合は「cmb_test1.pdf」です) となります。

8.2.8. その他のオプションや注意事項

PDF Server コマンドには [-N] オプションという特殊なオプションがあります。このオプションは標準出力へのコマンド実行状態を抑制します。(つまり、変換過程の情報を一切表示しません。) どのオプションと組み合わせても利用可能ですが、表示されないだけで変換動作には何も関係がありません。動作ログに関しては [-N] オプションの有無に関わらず、通常の「log」フォルダに出力されます。あと、コマンドラインの引数は半角スペースで区切りますが、ファイルパスなどに半角スペースが含まれる場合にはパスなどをダブルクォーテーション (") で囲む必要がありますので注意して下さい。[-T] オプションと [-O]、[-A]、[-D] 各オプションを同時に指定した場合、[-T] オプションが優先され、他のオプションはすべて無視されます。これらのオプションを同時に使用する事は避けて下さい。また、アプリケーション変換時のタイムアウト時間設定については PDF Server 設定 (PDFServer_v3.ini) の値を使用します。

8.2.9. 他のアプリケーションから呼び出して利用する場合の注意事項

Web アプリケーションなど、他のアプリケーションから PDF Server コマンドを使用する場合、以下の事に注意して下さい。

- ▼ MS-OfficeファイルのPDFファイルへの変換を同時に複数実行する場合、実行する数に応じた仮想プリンタが設定されている必要があります。製品に付属のツールを用いて設定して下さい。
- ▼ PDF Serverコマンドやフォルダなどに適切なアクセス権限を与えて下さい。アクセス権限がないとPDF Serverコマンドを実行出来なかったり、変換したファイルが出力されなかったりする恐れがあります。

8.2.10. マルチプロセスで利用する場合の注意事項

複数の PDFServerコマンドを同時に実行すると実行する場合、並行して実行されるプロセス数に応じたシステムリソースが必要になります。特に PDF ドライバを用いた Microsoft Office 文書の PDF 変換やサイズの大きな画像の PDF 変換を行う場合には大量のリソースを必要とします。メモリ不足によるエラーや CPU 負荷の増大によるレスポンスの悪化といった無用のトラブルを避けるためにも、以下の条件を考慮して運用することをお勧めします。

- ・ 同時に稼働させるプロセス数を実行するコンピュータに搭載されている CPU のコア数より少なくする。
- ・ 稼働させる 1 プロセスあたり 2GB 以上の空きメモリ量を確保する。

9. QRコード 作成ツール

「QRコード作成ツール」とは PDF Serverで読み取る事が出来る QRコードを作成するためのソフトウェアです。PDF Server用の QRコードを作成ツールですが、データを手入力することで PDF Server用ではない QRコードを作成することも可能です。「QRコード作成ツール」では以下の方法で QRコードを作成出来ます。

【手動処理】

QRコードにしたい情報を入力し、それを1つずつ QRコードにします。QRコードは QRコードのみをビットマップとしてファイルに出力するか、PDFファイルを指定し（入力ファイル）、その先頭ページの任意の場所に貼り付けるかのいずれかです。

【バッチ処理】

あらかじめ、PDF Server用の QRコード用のデータファイル（CSVファイル）作成しておくことで、一度に大量の QRコードを作成する事が出来ます。QRコードは手動処理と同様に QRコードのみをビットマップとしてファイルに出力するか、PDFファイルを指定し（入力ファイル）、その先頭ページの任意の場所に貼り付ける事が出来ます。さらに、バッチ処理ではラベル印刷ソフトウェア用データを作成することができます。これにより、シール台紙などに QRコードを印刷して書類に貼り付け、PDFにスキャンする事により、PDF Serverで処理が可能となります。

9.1. ラベル印刷用データについて

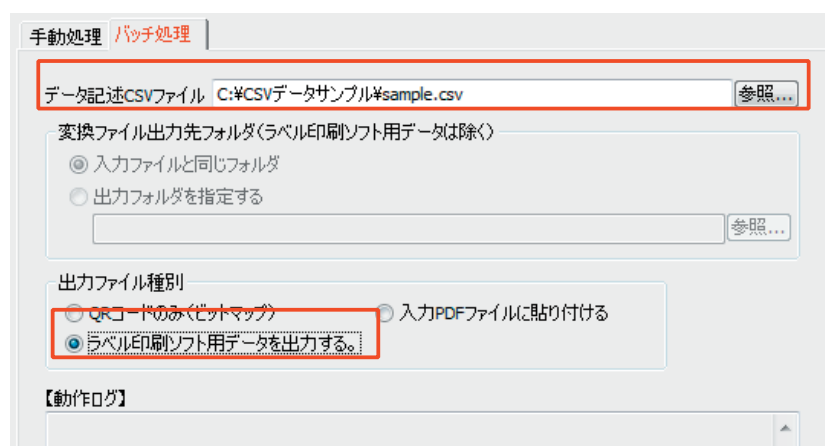
QRコード作成ツールでは、ラベル印刷用データを作成する事が出来るようになりました。対応しているラベル印刷ソフトウェアは「株式会社ジャストシステム」から発売されている「ラベルマイティ 11 プレミアム」です。以下にその一例を説明します。なお、ここで使用したサンプルデータの「Sample.csv」と「LabelPrintData.csv」はインストール CD-ROM 内の「Sample」→「QrTool」に収録してあります(プロフェッショナルエディションのみ)ので、参考にして下さい。

注意: 実際の「ラベルマイティ 11 プレミアム」の操作方法については、ソフトウェアに付属しているマニュアルなど参照して下さい。

1. データ作成

「QRコード作成ツール」起動し、「バッチ処理」タブをクリックします。

2. バッチ処理を利用してラベル印刷ソフト用データを作成します。



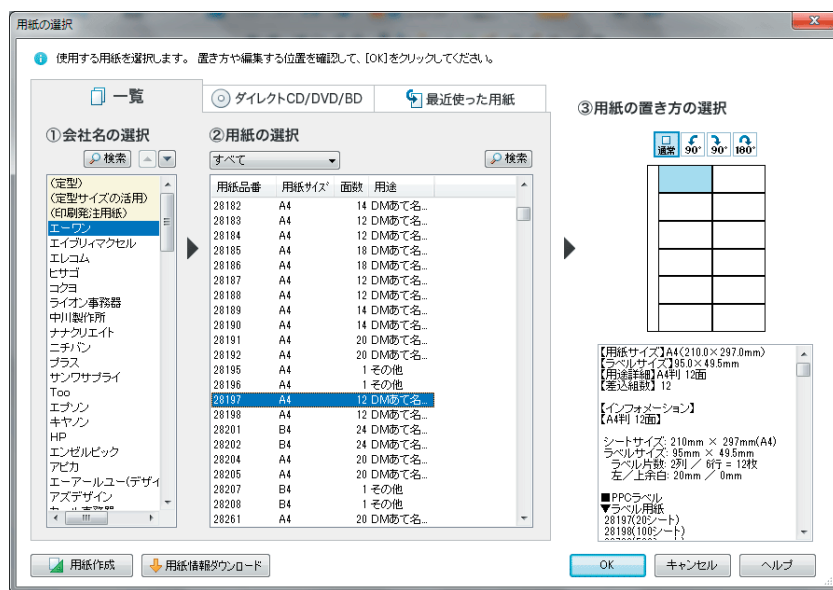
ここでは、サンプルファイル「sample.csv」をデータ記述 CSV ファイルに指定した後、出力ファイル種別として「ラベル印刷ソフト用データを出力する」を選択した後、「処理実行」ボタンをクリックして、ラベル用データファイル「LabelPrintData.csv」を出力します。

2. ラベルマイティ 11 プレミアムを起動します。今回、ラベル出力に「エーワン・PPC (コピー) ラベル (品番: 28197)」を利用するものとして作業を進めます。起動時に以下のようなダイアログが出力されたら「用紙から選ぶ」をクリックします。

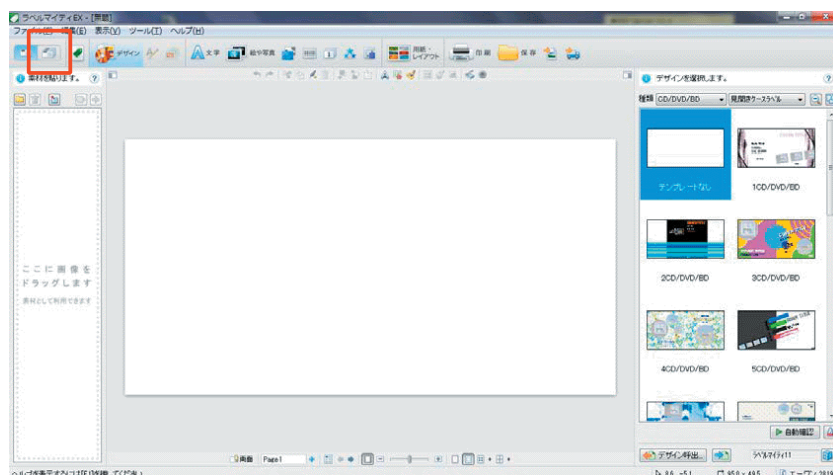


3. 「用紙の選択」ダイアログが開きます。

「会社名の選択」リストから「エーワン」、「用紙の選択」リストから「28197」で選択して「OK」ボタンをクリックします。

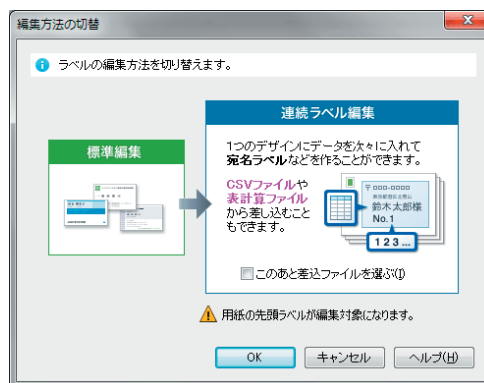


4. 以下のウィンドウが表示されます。



ツールバー左端の「連続編集」ボタンをクリックします。

5. 「編集方法の切り替え」ダイアログが表示されます。

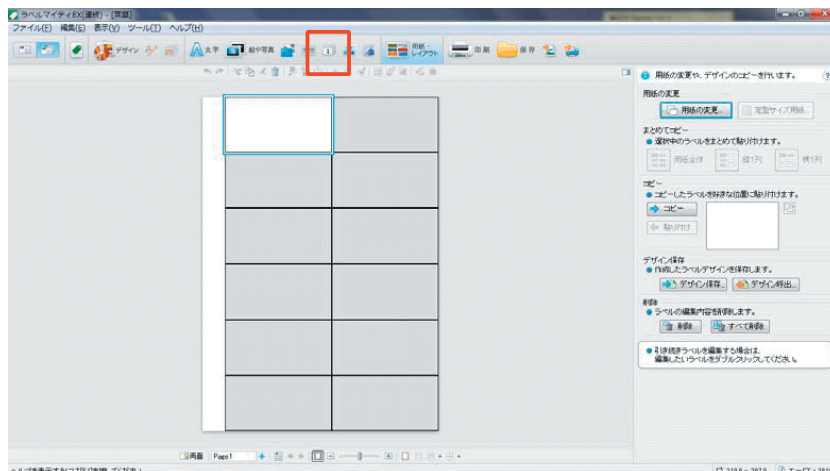


「OK」ボタンをクリックします。

6. ウィンドウが連続ラベル編集表示に変わります。

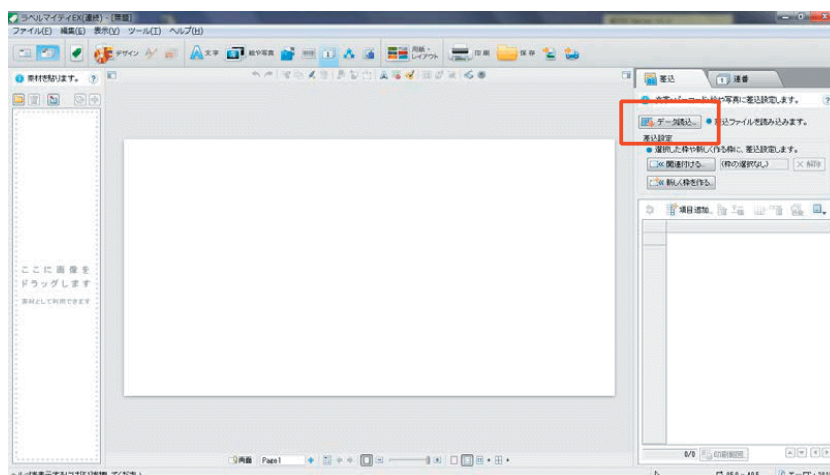
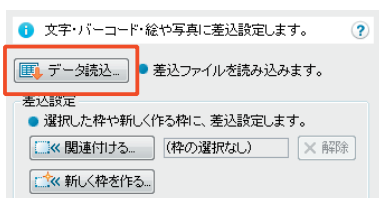


「データ差込・連番の設定」ボタン



「データ差込・連番の設定」ボタンをクリックします。

7. ウィンドウの表示が以下ようになります。

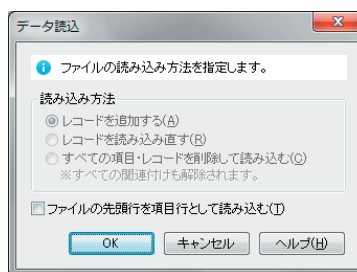


画面右の「差込」メニューの「データ差込…」ボタンをクリックします。

8. 「差込ファイルの選択」ダイアログが表示されます。

QRコード作成ツールで作成した「LabelPrintData.csv」を選択して、これを開きます。

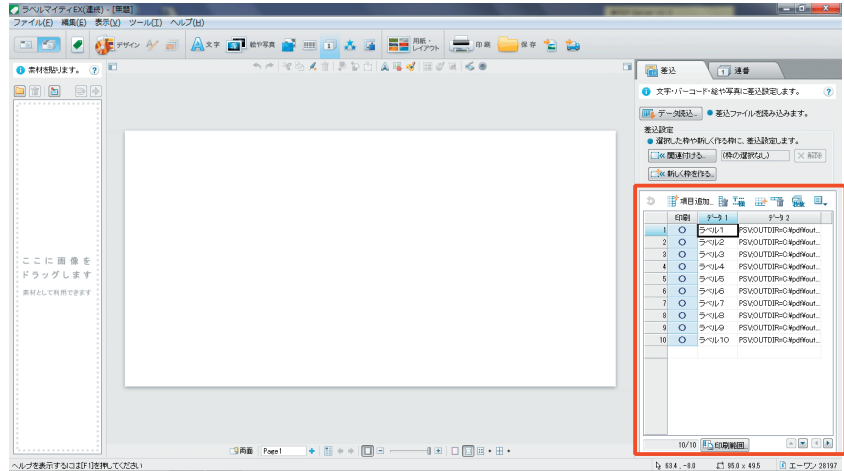
9. データ読み込み方法を指定するダイアログが表示されます。



ここでは、そのまま「OK」ボタンをクリックし、作業を進めます。

10. 画面右の「差込」タブ内にデータが読み込まれます。

	印刷	データ 1	データ 2
1	<input type="radio"/>	ラベル1	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
2	<input type="radio"/>	ラベル2	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
3	<input type="radio"/>	ラベル3	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
4	<input type="radio"/>	ラベル4	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
5	<input type="radio"/>	ラベル5	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
6	<input type="radio"/>	ラベル6	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
7	<input type="radio"/>	ラベル7	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
8	<input type="radio"/>	ラベル8	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
9	<input type="radio"/>	ラベル9	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...
10	<input type="radio"/>	ラベル10	PSV.OUTDIR=C:\pdf#out...

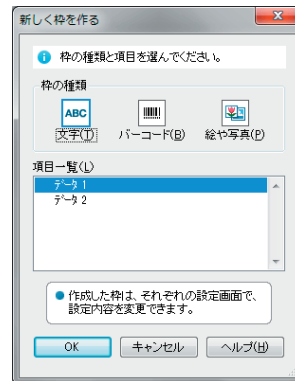
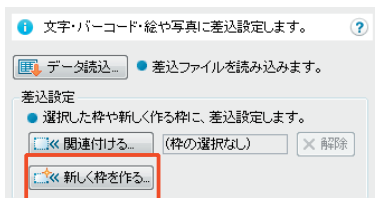


データ 1 がラベル情報、データ 2 がQRコード用のデータです。

11. ラベル用の枠を設定します。

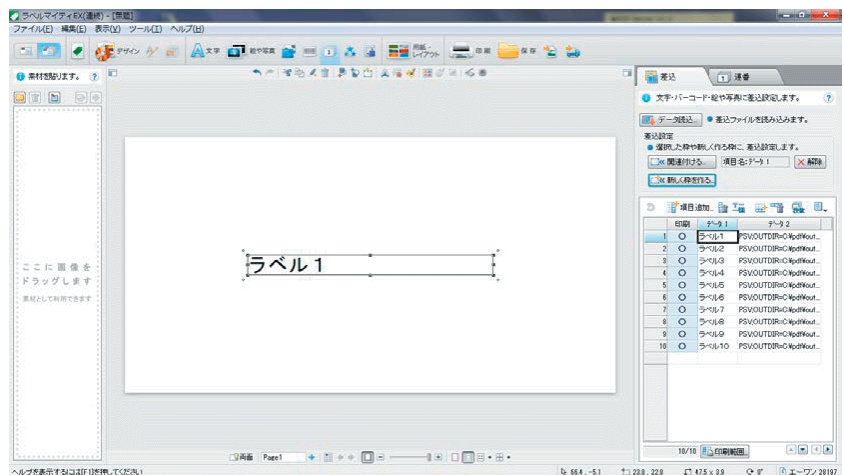
画面右の「差込」タブの「新しく枠を作る…」ボタンをクリックします。

12. 「新しく枠を作る」ダイアログが表示されます。



「枠の種類」を「文字」、「項目一覧」を「データ 1」で選択して「OK」ボタンをクリックします。

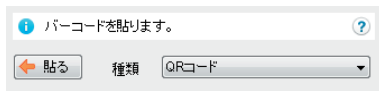
13. 以下のように画面右の「差込」タブ内に読み込まれたデータで選択されているものが表示された枠が表示されます。



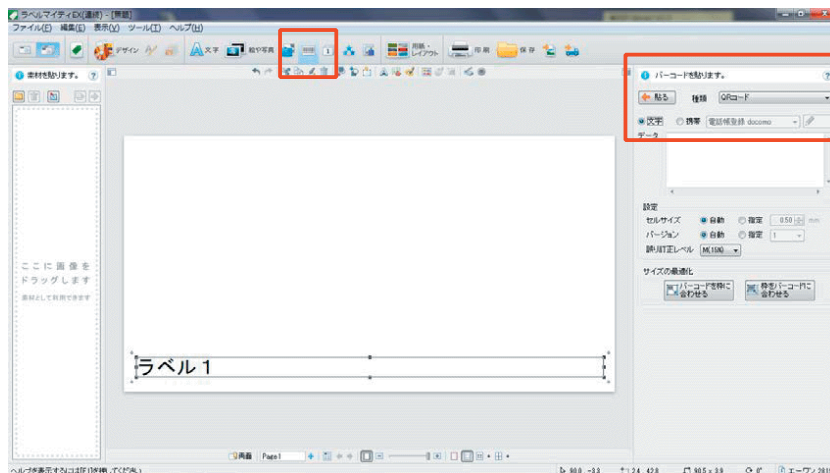
この枠をレイアウト内でドラッグして任意の位置と大きさにセットします。



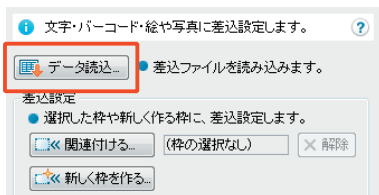
「バーコード作成」ボタン



14. ツールバーにある「バーコード作成」ボタンをクリックした後、画面右の設定で、「種類」を「QRコード」に変更します。



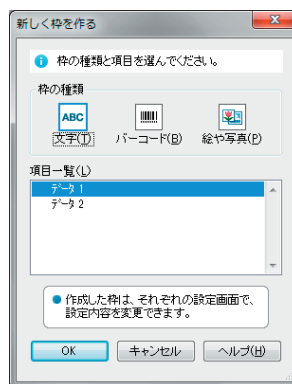
「データ差込・連番の設定」ボタン



15. 手順6の時と同様、「データ差込・連番の設定」ボタンをクリックします。

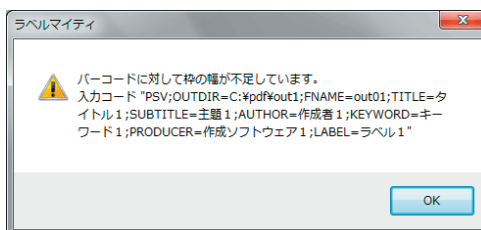
16. 手順7の時と同様、画面右側の「差込」タブの「新しく枠を作る…」ボタンをクリックして、QRコード用の枠を設定します。

17. 手順12と同様、「新しく枠を作る」ダイアログが表示されます。

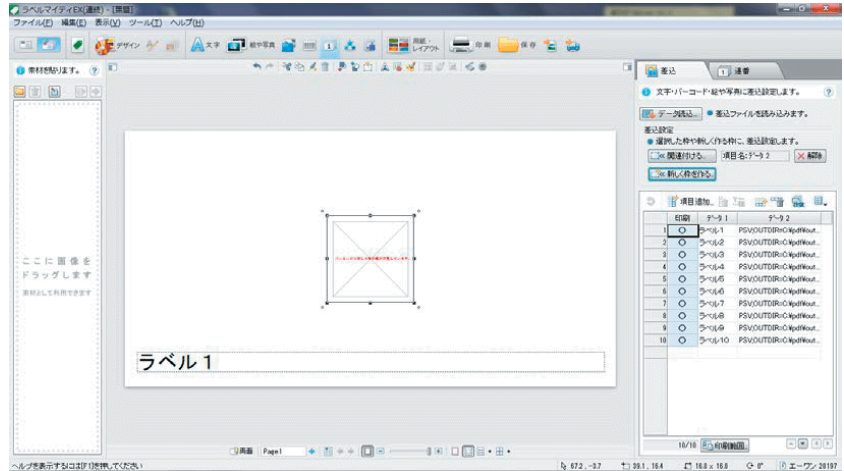


今度は「枠の種類」を「バーコード」、「項目一覧」を「データ2」で選択して「OK」ボタンをクリックします。

18. データ量が多い場合、以下のようなダイアログが表示されることがありますが、そのまま「OK」ボタンをクリックします。



19. 図のようにラベルレイアウト内にQRコードの枠ができます。



手順18のエラーが表示された場合には、この枠を広げてQRコードが表示されるように編集します。また、枠の位置も設定します。

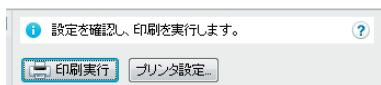
20. 枠を広げると、以下のようにQRコードが表示されます。



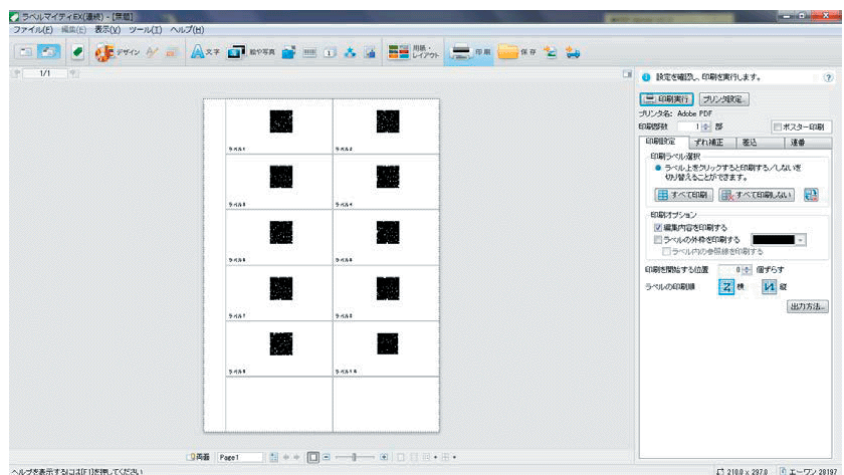
「印刷」ボタン

21. ツールバー上の「印刷」ボタンをクリックしてラベル印刷画面にします。

レイアウトを確認後、画面右側の「印刷実行」ボタンをクリックしてラベルを印刷します。



「印刷実行」ボタン



10. PDF スプリッタ

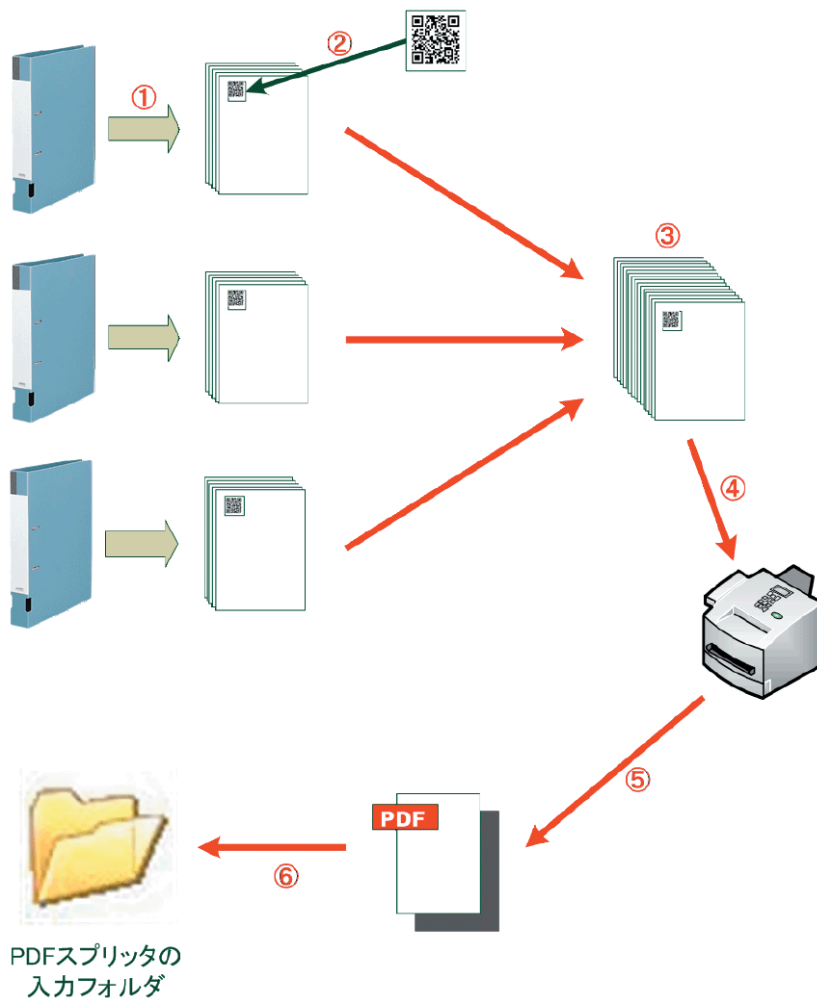
「PDF スプリッタ」とは、PDFファイル中にある PDF Server用の QRコードを持つページを「表紙(あるいは最初のページ)」として検出し、そのページを境に分割し、分割した PDFファイルを PDF Serverで処理させることを目的としたソフトウェアです。PDF スプリッタは PDF Serverのフロントエンドツールとして動作させる事を前提としています。そのため、PDF Serverサービスがインストールされていない環境では動作しませんので注意して下さい。(コマンド版では、インストールされません。)

10.1 ターゲットとなる PDF ファイルについて

PDF Server用 QRコードを持たない通常の PDF ファイルを PDFスプリッタに入力しても何の処理も行いません。また、PDFファイルの表紙(先頭ページ) にだけ PDF Server用 QRコードがあっても同様に何も処理しません。

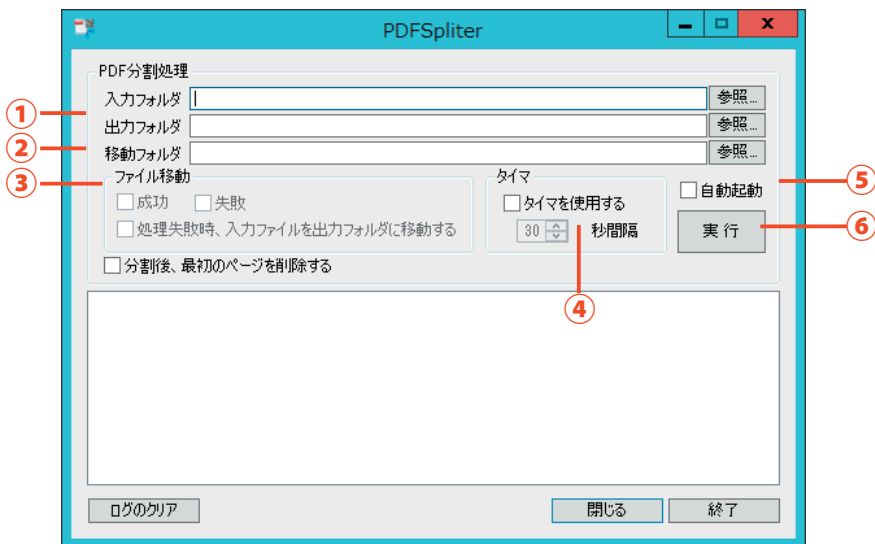
PDFスプリッタは、以下のような手順で作成された PDF ファイルをターゲットにしています。

- ① ファイルなどからの文書を取り出します。
- ② ①で取り出したファイルの表紙に予めQRコード作成ツールで作成して印刷しておいたQRコードを貼り付けます。
- ③ 作業①、②を複数冊分の文書について行い、1つにまとめます。
- ④ 作業③でまとめた文書を MFP やイメージスキャナなどでスキャンします。
- ⑤ スキャンしたデータを1つの PDFファイル にします。
- ⑥ 作成した PDF ファイルをPDFスプリッタの入力フォルダに入れて処理します。



10.2. PDF スプリッタの設定について

PDFスプリッタから出力された PDFをそのまま PDF Serverで処理を行うには以下のような設定を推奨します。



- ① 「出力フォルダ」はPDF Serverで処理したいタスクの監視フォルダと同じフォルダを選択します。
- ② 「移動フォルダ」は処理が終わった後に元のファイルを残しておきたい時に設定します。
- ③ 「ファイル移動」は成功/失敗でそれぞれ入力ファイルを残しておきたい場合チェックします。処理に失敗した場合、そのファイルをそのまま PDF Serverで処理したい時には「処理失敗時、入力ファイルを出力フォルダに移動する」をチェックします。なお、この「ファイル移動」は②の「移動フォルダ」に入力が無いとチェック出来ません。
- ④ 定期的に入力フォルダにファイルがないかチェックしてあったら自動的に処理を行いたい場合は「タイマを使用する」にチェックします。チェックするとその下の秒数設定が入力出来るので、5秒～120秒の間で設定します。30秒ぐらいを推奨します。
- ⑤ もし、PDFスプリッタを起動後すぐに処理を開始したい場合は「自動起動」にチェックをします。再起動後に実行したい時にはこの項目をチェックし、「タスクスケジューラ」などに登録しておきます(ショートカットを作成し、スタートアップフォルダに入れてもいいのですが、あまり推奨しません)。
- ⑥ ④の「タイマを使用する」にチェックがあった場合、「開始」と表示されます。このボタンをクリックすると、④にチェックがあれば自動で動作し(ボタンが「停止」になるので、もう一度クリックすると停止します)、チェックが無ければ1度だけ処理を行います。

